

女子新國文 卷七

42177

教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 810 |
| 42-1923 |
| 20000 39766 |

Kodak Gray Scale



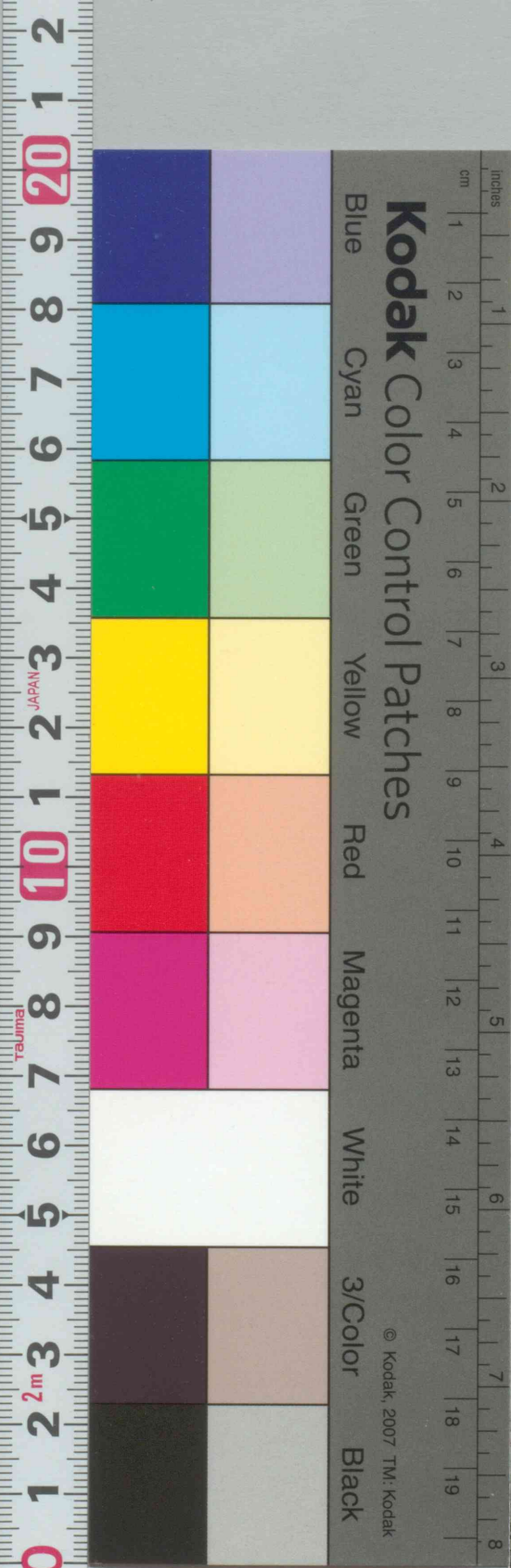
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

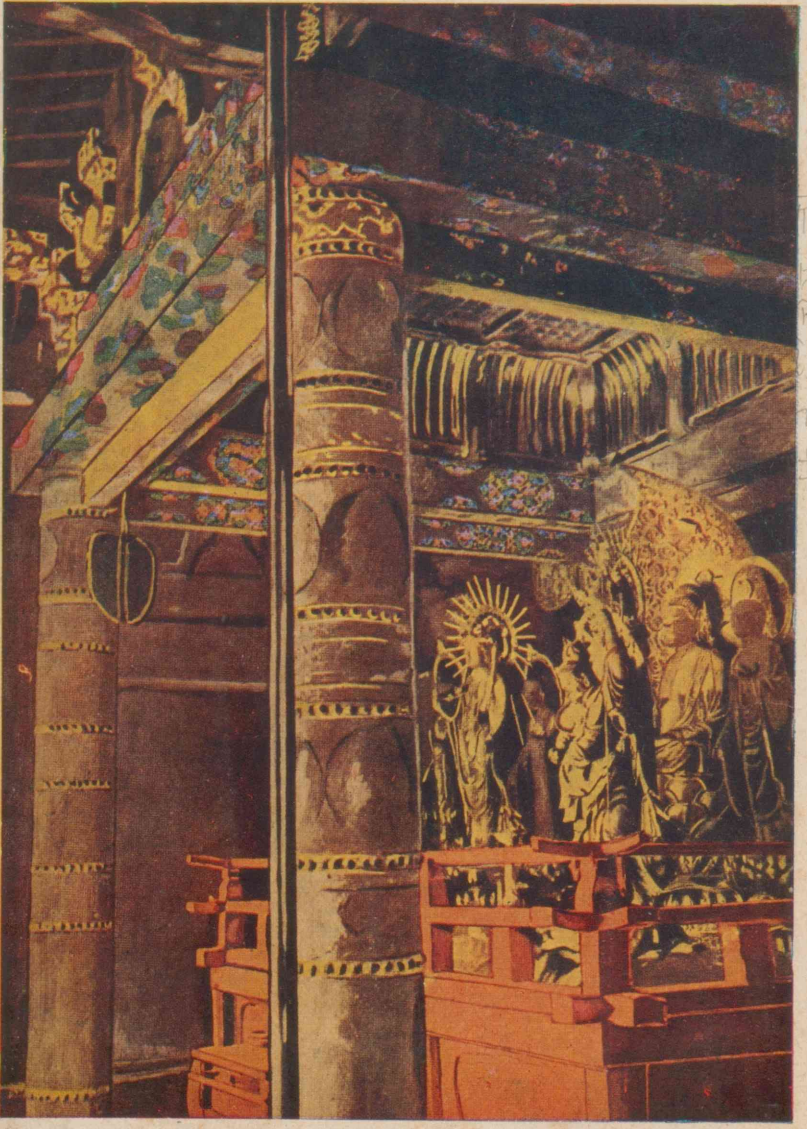
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Handwritten notes in the top left corner of the left page, including characters like 'わらわりのあつ', 'さしひく', 'あつらひ', and 'はま'.

教科書文庫
4
810
42-1923
2000039766



中止法(二般目車用)

堂 光

375.9
Ha7

資料室

大正二十二年十二月二十四日
文部省檢定濟

文學博士 芳賀矢一編

女子新國文

東京
合資會社
富山房

廣島大學
圖書印

廣島大學
教
39766
圖書

女子新國文 卷七

目次

| | | |
|---|-------------|----|
| 一 | 京都御所拜觀の記 | 一 |
| 二 | 雲雀 | 六 |
| 三 | 櫻 靜—狂言 | 九 |
| 四 | 光 堂 | 三 |
| 五 | をりふしのうつりかはり | 一九 |
| 六 | 松下禪尼と最明寺入道 | 三 |
| 七 | 節供と家庭(自修文) | 四 |

目次

女子新國文

広島大学図書

2000039766



| | | |
|----|---------------|----|
| 八 | 愛兒の記念 | 三〇 |
| 九 | 晩春の別離 | 三七 |
| 一〇 | 三つの眺 | 四〇 |
| 一一 | 日本趣味の特長 | 五一 |
| 一二 | あゝ尊い美の國よ(自修文) | 五六 |
| 一三 | 比叡山に登る | 六三 |
| 一四 | 東下り | 六六 |
| 一五 | 小松内府その一 | 六九 |
| 一六 | 小松内府その二 | 七三 |
| 一七 | 平家の都落 | 七七 |
| 一八 | 敦盛最期の事 | 八〇 |

シカフと下け
因
シナイ

あつめ
あつめ

みくよ

勅撰

天皇のあはれ
にまつてあつめ
より

| | | |
|----|---------------|-----|
| 一九 | 那須の與市の事 | 八四 |
| 二〇 | 武士の風流(自修文) | 八九 |
| 二一 | 春の句、夏の句 | 九五 |
| 二二 | 百花譜 | 九七 |
| 二三 | ワイマールより | 一〇〇 |
| 二四 | 函館から札幌まで(自修文) | 一〇六 |
| 二五 | 妻の眞心 | 一一四 |
| 二六 | 女子と文學 | 一二七 |
| 二七 | 十六夜日記 | 一三三 |
| 二八 | 西湖の月 | 一三七 |
| 二九 | 琵琶行 | 一三六 |

目次

たいこ天皇(菅原道房) 三

目次終

| | | |
|---|--------------------|-----|
| 一 | 繪に魂を入れる事(自修文)..... | 一三 |
| 二 | 鎮守の森..... | 一四 |
| 三 | 鬼に瘤を取らるゝ事..... | 一七 |
| 三 | み山のしづくその一..... | 一五三 |
| 四 | み山のしづくその二..... | 一五六 |
| | 昭憲皇太后の御事..... | 一六三 |

女子新國文 卷七

一 京都御所拜觀の記

京都御所を拜觀したる時ほど、神々しかりしことなし。我が拜觀したるは四月半ば頃なりしが、殿掌なる人に導かれて、かしここ廻るに、麗なる都の春は、たゞこの九重の中に籠れるが如く、踏む足も空にて、人間の世界を出でたるやうなり。

私に承るに、皇居は初よりここにありしにあらず。平安時代の末より、折々の里内裏となり、今より五百餘年前よりここに定まりしなり。百十餘年前天明の大火後、幕府勅命を受け、老中松平定信に命じて、新に造營の工を起す。従來略式にのみなり行きし皇居も、この

神々し
殿掌
踏む足も空
里内裏



よりつた
かみよを
受ける
の道

エルのみけ

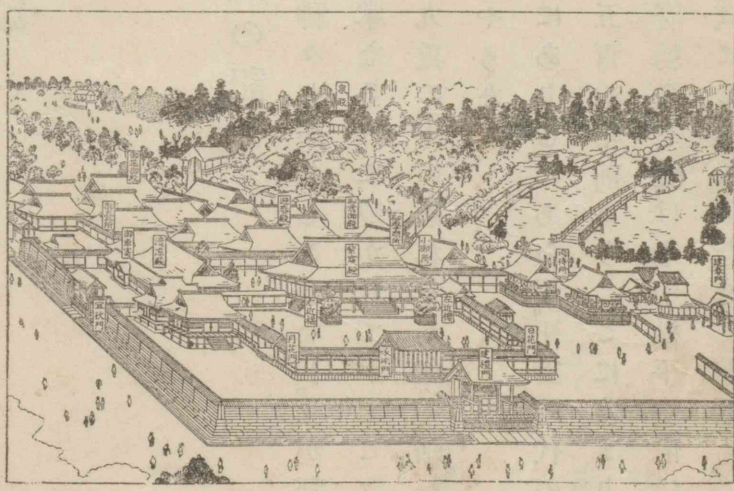
(一)孝明天皇の御
元。元年は紀
年。二五。一四

時より儼然として舊制に復した
り。然るに安政元年復大火に遭ひ、
更に造營の工事あり、概ね定信が
定めし式に従はしめられたる、即
ち今の御所ぞかし。

紫宸殿
清涼殿
故實をたゞ
す

紫宸殿清涼殿等は定信が深く
故實をたゞし、平安時代の舊制に
復せしものなり。今の御所も亦こ
れに倣へるものにして、千年の昔
を目のあたり見る心地す。

紫宸殿は皇居の正殿にして南
面し、その前に南庭あり。階前の左
右に左近櫻、右近の二本のあ



京 都 御 所 全 圖

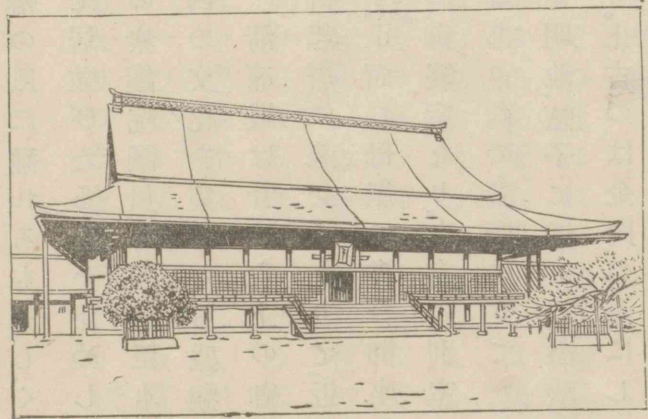
節會

めでたし

聖賢障子

(一)有名なる
家。清和、陽
成、光孝の五
多、醍醐の五
朝に歴仕し、
官大納言に至
る。

御帳臺



紫 宸 殿

る外は塵も留めず。今は春の日の、一面に敷詰めたる砂を射て、眩き
ばかりなるが、元日の節會に、ほのほ
のと明けはなれたる初日の光など
いかにめでたからんと覺ゆ。
殿は廣き一面の板敷にして、中に
唐代の賢臣をゑがける襖あり。いは
ゆる聖賢障子にして、昔は巨勢金岡
の筆になれるものなりきといふ。明
治天皇も、今の天皇陛下もここに
御即位の式を挙げ給ひしなり。大正
四年の大典には余も參列者の一人
たる光榮を擔ひしが、この日紫宸殿
上には天皇陛下の高御座と、皇后陛下の御帳臺とを据ゑ、階下近く

威儀の人

立てたる日光月光の大旛をはじめとして、紅、黄、緑、紫、幾十の大幡小幡の風に翻れるも麗しく、威儀の人の黒袍、紅袍、鉦鼓の人の緑袍にて居並びたるもいかめしかりき。廻廊には大禮服の文武官、燕尾服の衆議院議員、外國使臣も交りて、その對照まことに面白く、古今東西の文化を集めたる盛觀とぞ覺えし。

世移り風變る

清涼殿は昔は主上の御居間なりしが、世移り風變りては、日常の御起居に適せずなりて、近世はたゞ上古の形を存したるなりと申す。正面の母屋に晝の御座あり。御帳臺を立つ。傍の塗籠は夜、御殿とて、御寢室なり。左右の別室には、殿上といひて、殿上人の宿直する所等あり。前の廣廂に立てたる衝立に、年中行事、障子、昆明池、障子あり。昆明池、障子に近く、荒海、障子あり。又殿上の外の渡廊に馬形、障子あり。上古のは金岡の筆にして、夜々脱けいでて萩の戸の萩を食ひしかば、勅ありて轡をゑがき加へしめられたりと傳ふるはこれなり。

母屋
塗籠

廣廂

仙洞御所
北面ス

上皇
の事

あれこれ

林泉の巧

(一)賀茂川の一名

(二)比叡山の一支峯

清涼殿は東面にして、階前左右に河竹、吳竹を植ゑ、御溝の水その側を流る。

その他には小御所、御學問所、常御殿等あり。いづれも近世の様式なり。小御所、御學問所は謁見など仰せつけらるゝ所、折により拜謁者の階級によりて、ここかしこの別あり。常御殿は即ち御居間と申す。その東の御庭、林泉の巧いふばかりなし。蟬の(一)小川を堰入れて池をたゞへ、池邊には花木を植ゑて、四季の眺絶えず。東山一帯亦一眸の中に入る。殊に彼方の木立少し切下げたるは、如意嶽の大文字の火を望み給はんが爲とぞ。
一わたり拜觀したるばかりにて、よくは覺えず。九重の雲深き御あたりの事を書出づるも畏しや。

二 雲 雀

尾崎喜八

青ぞらは光の海。

太陽は巨大な輝く搖籃。

そして野は

緑と鶯色と銀と淡紅とでぎつしりと織りつめられ

た丈夫な美しい絨毯。

沸々

沸々と増盛するもので野は一ぱい。

ここでは雑木の根で組みかためられた土手の下を、

小川が若い女の腕のやうに

ぐる／＼と漲つて流れ、

路の栗色の帯をさしはさんで、

まろい大地の腹に、

鮮麗な麥畑がうねり打つて展開してゐる。

光にまみれた高い空間で、

氣も速くなるやうな一つの聲が、

きら／＼と急調子のトレモロをやつてゐる。

雲雀。今年始めての野の雲雀。

おゝ、潤然たる田園を見おろすあんな空で、

小さな全身を歡喜にふるはせ、

あるかぎりの音量をまきちらして雲雀は歌ふ。

まつきをな空氣の層をゆるがす

喉一ぱいの彼のトレンブル。

[Tremolo.

[Tremble.

まるでとんでもない幸福の夢想が、
彼の微細な脳髓を占領してしまつたかのやう。
頭を太陽に向け、
強い翼をぶるくふるはせ、
その幸福な夢想に興奮して地上の一切事を忘れ、
目に見えぬ空の階段を、
雲雀は
熱氣に打たれて駆けのぼる。
紗のやうな薄い雲が太陽の前を通つて、
すべての色彩が光を吸つて鮮明になる。
突然空中の歌が止んだ。

恍惚

恍惚が醒め、風景がかげろ。
まだ少しひやりとする風が畑をわたつて、
櫛の枝で去年の枯葉がからく鳴る。
雲雀は小さな黒點となつて、
つぶてのやうに野に落ちた。

— 空と樹木 —

三 櫻 諍—狂言

アド「これはこの邊の者で御さる。このごろ何方も花の盛ぢやと申すほどに、花見に参りたる存ずれども、暇がなさに参ることもえ致さぬ。もはや暇になつて御座るほどに、けふは花見に参らうと存ずる。まづ太郎冠者を喚出し、申しつけう。やい、太郎冠者あるか。
シテ「はあ。アド「居たか。シテ「お前に居ります。
アド「汝を喚出すこと別の事ではない。頃日は方々花盛ぢやといへ

え致さぬ

頼うだ人

ども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。もはや暇になつたほどに、花見にいでうと思ふが、何とあらうぞ。シテ「これは珍しい事を仰せられます。このごろは櫻の盛ぢやと申すほどに、櫻を御覽ぜられうとあれば、尤もでござるが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にさせらるゝ。アド「いや、おのれ何事をいふ。櫻も花も同じ事ぢや。シテ「これは頼うだ人とも覚えぬ事を仰せらるゝ。さやうに仰せられたらば、人中で耻をかゝせられう、身どもは苦しうござらぬが。アド「して、汝がそのやうにいふは仔細があるか。シテ「なか／＼、仔細こそ御座れ。はなが見させられたくば、私が鼻を見させられ。他所へ御座るまでもござらぬ。アド「いや、汝は言語道斷の事をいひ居る。汝が面なは鼻といふ。花といふは別ぢや。シテ「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。アド「なか／＼、でもない事をいひ居る。その歌を讀うて聞かせい。シテ「讀うて聞かせた

でもない事

(一)古今集卷一春
上に出づ。紀
貫之の歌。

(二)平家物語卷九
度に出づ。平忠
度の歌。

(三)古今集卷一春
上に出づ。讀
人知らず。

(四)古今集卷二春
下に出づ。小
野小町の歌。

らば、肝を潰させられう。アド「急いで讀め。シテ「心得ました。
櫻（一）ちる木の下かぜは寒からで
そらに知られぬ雪ぞ降りける
これは何と。アド「此方にも花といふ歌がある。シテ「さらば讀うて聞
かせられい。
行き（二）くれて木の下蔭を宿とせば
はなや今宵のあるじならまし

シテ「此方にもまだ御座る。

や（三）ま櫻わが見にくれば春がすみ
峯にも尾にもたちかくしつゝ

アド「それなら此方にもある。

花（四）の色はうつりにけりないたづらに
わが身世にふるながめせしまに

總別
むざとした
事

(一)岩手縣西磐井
郡平泉村。嘉
祥三年慈覺大
師の開基と傳
ふ。

シテ「それならば此方に詣がござる。アド、唄へ、聽かう。シテ、櫻かざしの袖ふれて。アド、一段の謠唄ふ。致しやうがござる。やい太郎冠者。諸花見車くるゝより、月の花よ待たうよく。シテはあ、これでつまりました。アド、總別何も知り居らいて、むざとした事をいひ居つて、某と競合ひ居る。彼方へ失せい。シテはあ。アド、えい。シテはあ。

續狂言記

四 光 堂

泉 鏡 花

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。
大きな廣い本堂に、見上げるやうな釋尊の外、寂莫として何も無い、それが莊嚴であつた。日の光が幽に漏れた。
裏門の方へ出ようとする傍に寺の厨があつて、そこで巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、初め藥師堂、次に寶



中 尊 寺 全 景

物庫さて金色堂いはゆる光堂、續いて經藏、辨財天といふ順序である。
皆參詣の人を待つて、始めて扉を開く。すぐ又あとを鎖すのである。寶物庫には番人が居て、經藏には年紀の少い出家が、火の氣もなしに、一人經机に向つてゐた。
初め藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、この番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、且芝生に散つて、敷いたやうであつた。
櫻は中尊寺の門内にも咲いて居た。麓

空さま
浮彫

から上らうとする坂の下の取附の處にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一緒に、たしか「淺葱櫻」といふ札が建つて居た。けれどもそれのみには限らない。處々汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに随つて、ばつと見えを見せて咲いたのはなかつた。薄墨、鬱金、また淺葱といったやうな、どの櫻も皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帯びてゐた。雲が黒かつた爲かも知れない。と階の前の花片が、折からの冷たい風にばらばらと誘はれてさつと散つて、この光堂の中を空さまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に玉を刻んで緑青にさびたのが、なほ嚴に美しい。その翼をばらばらとたたいて、ちらちらと床にこぼれかゝる。やがて宙で黄金の卷柱の光をうけて、ばつと金色に翺るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を見はつた。床も、承塵も、柱はもとより、たゞずむ處、踏む處は、黒漆の落ちた黄

仙骨
七寶莊嚴

種々相



金である。黄金の剝げた黒漆とは思はれないで、しかも些のけばけばしい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。われ等仙骨を持たない身も、この雲は且踏んでも破れぬ。その雲を透かして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しい虹をそのまゝ柱にしてゑがいた十二光佛の微妙な種々相は、一つ一つ錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中にあらはれて、清く明らかに、しかも幽な幻である。その十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流れるが如く輝かして、寶相華、勝曼華が隙間もなく咲きめぐつて居る。

あはれ
つやが
たもの

この柱が須彌壇の四隅にある、まことに天上の柱である。須彌壇は三座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天、六地藏が安置され、壇の中には真中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、ここに各一口の劔を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのまゝに横たはつて居るさうである。

雛芥子の紅は美人の屍より開いたと聞く。光堂はここに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

天界一叢の雲

謹んで辭して、天界一叢の雲を下りた。

階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、風に軽く吹かれ、きらきらと輝くのを、不思議な塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。またいやが上に懐かしい。

羽目には天女、迦陵頻迦が髣髴として舞ひつゝ、かなでつゝ浮出

迦陵頻迦

爛々

拂子
錫杖

紺紙金泥

て居る。影をうけた束貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿である。

漆塗、金の八角の臺座には、本尊文殊師利朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた、青い毛の部厚な横顔が見られるが、づづつと足を舉げさうな構である。右にこの轡を取つて、ちよつと振向いて、菩薩にもを言ひさうなのが優闍王、左に一匣を捧げたのは善哉童子、この両側左右の背後に、淨名居士と佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうに杖ついて立つ。髯も、額も、目も、眉も、そのいづれも莞爾々々として、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふのである。獅子が。

この須彌壇を左に、一架を高く設けて、ここに紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で、本經の圖解を糸がく。清麗巧緻で、且神秘である。

（わけにまはら）

（一）平泉村にあ
り。醫王山金
剛王院と稱
す。嘉祥年中
慈覺大師の開
基と傳ふ。

今ここに來てこの經を見ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧げるが如く、これは月光を仰ぐやうであつた。架の裏に色の青白い瘦せた墨染の若い出家が一人居た。私の一禮に答へて、

「お緩り御覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく、堂の内壁にめぐらした八つの柵に満ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書の一切經、並びに判官最眞の第一人者三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて居る。一切經の全部量は、七駄片馬と稱へるのである。

「拜見をいたしました。」

「はい。」

と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、卷袖で、

黄紙宋板

最眞

散佚

目とかけ
るささてる

たよりなげ
たよりなげ
たよりなげ
たよりなげ

をりふしの
うつりかは
り

（一）春はたゞ花
のひとへに咲
くばかりに物
のあはれは秋
ぞまされる人
（拾遺集、讀人
不知）

氣色立つ

名にこそ負
へれ
おぼつかな
きさました
る

寒くほつそりと草を行く。清らかな僧であつた。

五 をりふしのうつりかはり

兼好法師

をりふしのうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ、物のあはれは秋こそまさされ。と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう／＼氣色立つほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわた／＼しう散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古の事もたちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。

五 をりふしのうつりかはり

かきくま
けいん
あか

(一)陰曆四月八日
(二)賀茂祭。四月の中の酉の日

水鶏のたぐ
蚊遣火
(三)六月晦日の大祓

取りあつめたる事
今更にいはいは
じとにもあ
らず
あぢきなし
すさび
かいやり捨
つべきもの

遣水

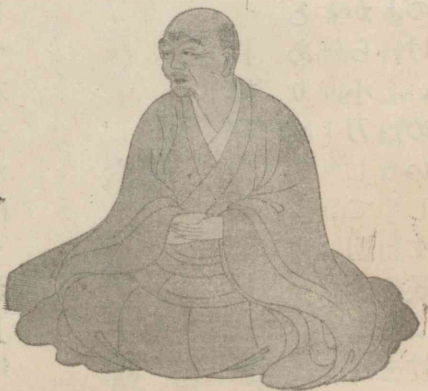
灌佛の頃、祭の頃若葉の稍涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも人のこひしさもまされと人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめ葺く頃、早苗とる頃、水鶏のたぐなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月ばらへまたをかし。棚機祭るこそ艶かしけれ。
やうく夜寒になるほど、雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈干すなど、取りあつめたる事は、秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草子などに事ふりにたれど、同じ事又今更にいはいはじとにもあらず。おぼしき事は、ぬは腹ふくるゝわぎなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つ

十五日 餅の月
十六日 立待月
十七日 雁待月
十八日 住待月
十九日 庵待月

(一)十二月十九日
より二十一日
まで三日間宮
中に行はれし
佛事
(二)十陵八墓に幣
帛を奉られし
使
やんごとな
し

(三)十二月晦日に
行はれし鬼や
らひ

ことくし



こそをかしけれ。

年の暮れはてて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、

兼心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つ好などぞ、あはれにやんごとなき。公事ど法もしげく、春のいそぎに取重ねて催し師行はるゝさまぞいみじきや。

追儼より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう闇きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門叩き走りありきて、何事にかあらん、ことごとしくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人のくる夜とて、魂祭るわざ

五 をりふしのうつりかはり

は、この頃都にはなきを、あづまの方には尙することにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、きのふに變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立てわたして、花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。——徒然草——

六 松下禪尼と最明寺入道兼好法師

一 松下禪尼

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝことありけるに、すゝけたるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ、張られければ、兄の城介義景その日のけいめいして候ひけるが、賜はりてなにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得たるものに候。と申されければ、その男尼が細工によもまさり侍らじ。とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、皆を張

せうらん
けいめい

世の平に有るに
水常にかんやす

千五百番歌
會によませ
給ける

後鳥羽院
御歌

あしのやの
なだのしほ
くむあまび
ともしほる
に袖のいと
まなきまで

ふるる書らるよよせけを
極も明にひき
あしのやのなだのしほくむあまびともしほるに袖のいとまなきまで

傳兼好筆蹟

なり。と申されける、いと有難かりけり。世を治むる道、儉約を

りかへ候はんは、遙かにたやすく候ふべし。斑に候ふも見苦しくや。と重ねて申されければ、尼も後はさわくゝと張りかへんと思へども、けふばかりはわざとかくあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ふることぞと、若き人に見ならはせて、心づけんため

二 最明寺入道 附解

本とす。女性なれども聖人の心に通へり。天下をたもつほどの人の子にもたれける。誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。
平宣時朝臣、老ののち昔がたりに、最明寺入道あるよひの間によ

ことやう

たうぶ
さうくし

紙燭

ばるゝ事ありしに、やがてと申しながら、直垂のなくてとかくせし
ほかに、また使きたりて「直垂なんどのさふらはぬにや。夜なればこ
とやうなりとも疾く。」とありしかば、なえたる直垂、うちうちのまゝ
にて罷りたりしに、銚子にかはらけ取りそへてもて出でて、「この酒
をひとりたうべんがさうくしければ申しつるなり。肴こそなけ
れ。人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあるといづくまでも求め
給へ。」とありしかば、紙燭さしてくまぐまを求めしほどに、臺所の棚
に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、「これぞ求め得てさふ
らふ。」と申し、かば、事足りなんとて、心よく數獻におよびて興に入
られ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか。」と申されき。

—徒然草—

(一)文學士、現東
京女子高等師
範學校教授。

自修文

七 節供と家庭

(一) 倉橋惣三

骨董的
物ずきの意。

社會的傾向
家庭以外社會
全體として適
するやうなか
たむき。
愛の光に云
親子兄弟姉妹
等家族の愛情
で全く親しみ
あふこと。

女の子の爲に三月の雛祭があり、五月端午の節供を男の子の
爲にあてて、日本全國津々浦々まで、國中舉つて子供の爲にお祝
をするといふことは、まことに趣の深い詩的な年中行事で、子供
の爲に大層幸福なことであります。

雛祭も、端午の節供も、子供の爲の祝日ですから、大人の弄ぶ骨
董的な性質のものでもなければ、風流といふやうな意味のもの
でもなく、一家が専ら子供の爲に喜ぶといふことが中心になら
なければなりません。その歴史的由來がたとひどうであらうと
も、新しい意味に於て、我が國に存在する一年に一日の子供日は、
さういふやうにありたいのであります。

すべて子供の爲の喜とか祝とかいふやうな事は、家庭的性質
のものでなければなりません。彼のクリスマスなども、我が國で
は子供の爲に、家庭内で喜び樂しむといふよりも、寧ろ社會的傾
向を帯びて居りますが、本來は家庭内に於て、一家團樂、暖い愛の

徹頭徹尾
どこからどこ
までも
家族意識
持たせたいふ氣

情味
あぢはひ。お
もむき。

光に融合ふといふこととてなければならぬのであります。
さういふ意味から見ると、端午の節供の如きも、徹頭徹尾、家庭的性質のもので、その中には自ら家族意識、或は家庭感情といふものが伴なつて、子供心に家庭とか家族とかいふ優しい情緒を養ふ爲に有効なのであります。例へば、家内中の人たちが嬉々として武者人形を飾つて下さるとか、或は父や兄が長い竿を立てて鯉幟を吊上げて下さるとか、一方には母や姉が一所懸命になつて柏餅をこしらへて下さる、その柏餅を包む柏の葉も、裏の山からみんな取つて来たものであり、柏餅につくる米の粉は、祖母さんが数日前から、せつせと挽臼で挽いて下すつたのだといふやうなところに、言ふに言はれぬ家庭的な、そして教育的な情味を含んで居るのであります。

お祝が家庭的であるといふのは、祖先を敬つて自分の一家を愛する感じを子供に起させるのに誠に都合がよい。三月の雛祭

堅實
たしかでしつ
かりしてゐる
こと。

にしても同じことですが、五月節供の武者人形でも、古くから我が家に傳はつて居る人形は、土藏から出して来て飾るといふやうなところに、何等の説明も講釋もせずとも、我が家の古い歴史を尊ぶ感じを與へることが出来るのであります。

今日の如き時代にあつては、子供にかういふ方面の「我が家」といふ感じが缺けて居ますし、又平素かうした感じを養はせるといふことは、甚だむづかしいのであります。かういふ感じを持つといふことは、子供の堅實な情緒を養ふ上に甚だ有効なことで、且是非とも必要なことであります。けれども餘り祖先崇拜的な嚴肅な形で子供を強ひることは、その割に効がないのであります。かういふ特別な一日の愉快な氣分の中に、我が家の歴史といふやうな感じを與へることが出来る、とすれば、この一日を大いに利用したいもので、この意味からいへば、新しい人形や飾物を澤山買つてやるよりも、古い物を保存して用ひることが、望

具體的
實物に據つて
まとまつた。

ましいのであります。
古い物を保存して用ひれば、お節供が年々繰返されて行くことによつて、子供は自分の生まれた時のいはゆる初節供からの人形が並べられるのを見て、別に説明せずとも、最も愉快な、そして具體的な自分の生立ちの感じを味はふことが出来ます。それが爲に、子供は自分の小さい時の事を考へるといふやうな感情的な事はなく、又考へさせるやうではいけません。が、さつぱりした明るい氣持の中に、自分の生まれた時から、親たちがかうして愛して下すつたといふ感じを持つものであります。

前に述べた意味を一步進めると、國家といふ感じを、極めてあどけない子供らしい意味に於て、子供の心に入れることが出来ます。鎧とか、冑とか、太刀とか、武者人形とか、五月節供の飾物に就いて、今日の時代では、それを知識的に子供に教へる必要はないかも知れぬが、かういふものほど、きはめて自然的に、國家といふ

現實的
現に實際ある
通りの式。即ち
寫實的
實物をうつし
たやうな。

感じを起させるものはない。鎧、冑、武者人形等に對する子供の心持は、極めて具體的な感情に充ちて來て、一種堅實な情緒を養ふことが出来るのであります。

さういふ意味からして、飾物には昔風の物が好ましいと思ひます。餘り現實的、寫實的意味のものよりも、やはり昔のものがよいと思ひます。必ずしも牛若や、辨慶や、金太郎ばかりを選べといふ意味でなく、さういふものによつて、習慣的に起されて居るこの日の或感じを保存したいのであります。特にこの日に限つて、かういふ教育を與へねばならぬといふやうな子供に強ひる意味でなしに、この日の價值を認めねばならぬと思ひます。

それから別段何といふ譯合とか理窟ではありませんが、この日の與へるところの一種獨特の氣分といふものを、理解し又保存する必要が有ります。

桃の花咲く長閑な春の一日に女の子の爲に雛の節供があり、

剛健
しつかりして
屈しないこ
と。

阜月晴
五月頃の空の
快晴。

(一)東京市深川區
仲大工町にあ
り。浄土宗。京
都知恩院の末
寺。

(二)名は武保。歴
史畫の大家。
明治十一年六
月歿。年九十
六。
經營慘憺

新緑爽な初夏の一日に、男の子の爲に端午の節供があるといふことは、言ふに言はれぬ季節の面白味があります。更に細かく考へて見ますれば、雛祭のどこまでも女性的なのに引換へ、端午の節供は飽くまでも男性的で、一方の草餅、櫻餅には優しい風情があります。一方の柏餅や鋭い太刀のやうな菖蒲の葉を用ひる上には、何となく男らしい剛健な気分があります。殊に雛祭は室内的であり、端午の節供は戶外に高い鯉幟を吹流して、子供にはゆるる阜月晴の快活な空を仰がせるといふところにかうした気分上の感化のあるのを見のがしてはなりません。

八 愛兒の記念

藤岡作太郎

深川の本誓寺に詣でて、五百羅漢の畫幅を拜觀したることありき。畫は菊池容齋が經營慘憺の筆に成りし大作にて、春秋の彼岸に

有縁

畢生の心血
を絞る

(一)明治天皇。

書肆
上梓
管底
紙魚の棲と
なる
忘年の友
(二)高僧。芝増上
寺の住職。明
治二十一年四
月歿。年八十
三。



藤岡作太郎

はこれをかけ列ねて供養し、普く有縁の參拜を許す由なれば、友人平出君を誘ひて、歩を運びしなり。容齋が執筆の因縁については、あはれなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前賢故實は、この歴史畫家が畢生の心血を絞りにて、成るべきに、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が日本畫士の號を賜ひしも、これが爲なるべく、孝明天皇が和氣清麿に神號を追贈あらせられしも、本書がその動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初はこの十年苦心の作も、發行の書肆なく、上梓の資財なく、久しく管底に籠めて、徒に紙魚の棲となるを待つばかりなりしかば、この事餘りに情なく、をりふしは忘年の親友なりし福田行誠に向ひて、堪難き遺憾の情を漏らしたりき。

手の中の珠
とかしづく

時に幕末の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり。手の中の珠とかしづくし一人の女、年頃にもなりしかば、或方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。婚禮のをり持参せし衣服調度、今はこなたに置きても詮なし。たゞ歎の種ぞ。とて、婿の方より里方へ返す。里方には受取らず、一旦遣はし、女の道具は即ちそなたの物。それを返さるゝは、死したる者を離縁するやうにて、草葉の蔭にもいかばかり悲しからん。これはそなたへ、「いやこなたへ」と押問答のはて、金兵衛は腕拱きて、さらば吾に思案あり。今深川におはす行誠上人は浄土宗の大徳、古今の名僧と聞くに、この聖に託しまゐらせなば、衆生濟度の便ともし給ひて、亡き女が往生の縁ともなりぬべし。といふに、即ち相談は決し、かの調度を賣却し、なほ硝尾をあはせて、一千兩の金を行誠に捧ぐ。さてこそ行誠は容齋を招きて、喜ばれよ。御身の志は成りぬ。印刷の料は調へ得たり。とあるに、容齋は涙

腕拱く

大徳

衆生濟度

善いかな

應眞
施主

佛に物を
いさす人

什物
(たから)

ぐむまでうれしく、有難く、脱稿の後凡そ二十年にして、ここに前賢故實の出版に取りかゝりしなり。年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてかこの大恩に報ゆべき。と尋ぬるに、行誠は、善いかな。さらば五百應眞の圖をゑがきて供養し給はば、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん。御身の満足より延いては世間の満足も、ひとへに世を早うせし少女の爲、それを悲しむ父母の爲なるを。と示す。それこそ吾にはふさはしき業。いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかり。と、沐浴齋戒してゑがき上げたるが、この本誓寺の什物なりとかや。

われ等が参詣せし折も、くさくさの供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍しく面白きを取集めたるがあり。これも近頃愛兒を失ひし人の、その遺物をここに納めしなりとの事なりしが、一わたりあはれと見たるばかりにて、さして心にも留らず。畫幅の由緒も平

とあり
かゝり

古めかしき
言ひぐさ

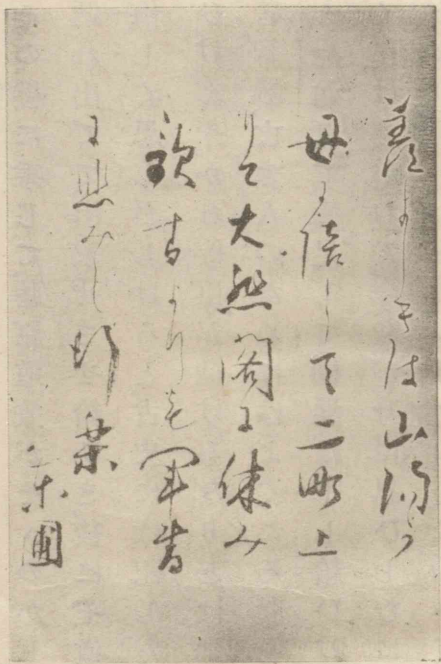
あらばあら
るゝことか
(一)ある時はあ
りのすさびに
なくかりき
こひしかるべ
き
ありのすさ
び

たく聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかゝりなど思ふまゝの事を言散らして、さて過ぎにき。
今思へばあさはかなりし事かな。昨日は人の身の上、今日は我が身など、古めかしき言ひぐさながら、今こそひしと心の底に浸みぬれ。吾も一昨年、夏、長女を失ひぬ。長女名は光、時に七歳。笑ひさざめき遊び戯れしものはかなき病に、忽然とこの世を去るべしとは誰か思はん。我が身はすでに四十に近し。この後爲すべき事の奥も測り知られたり。たゞ我が子のみぞ我が誇、我が望なりしを、一朝にして死の手に奪ひ去らるゝこと、あらばあらるゝことか。かくても過さば過さるゝことか。ある時はありのすさびに過してき。なくてぞ眞のあはれさは知りぬる。よくもあしくも咲出でたる花の、手折らるゝはさてありぬべし。固き蒼の人の目に留るともなくて、不意の嵐にもぎ取られし恨はいかばかり。年たけて、少しにても世

物のあやめ

美ましきは
山陽が母に
陪して二町
上りて大悲
閣に休み歌
書よりも軍
書に悲みし
行樂
東圃

英雄の心事



にあるかひの務をなしたらば知らず、やうく物のあやめも覺ゆるほどに、早くももとの闇路に歸りなば、かゝる者のありしと知るは、家の内の人ばかり。世藤にも知られて空しく來岡り、また往くこと、いかに悲しきことぞ。
太郎 豊太閣が朝鮮征伐を筆思ひ立ちしは、老いての蹟後やうく儲けたりしみどり兒に死なれて鬱

悶やるかたなく、いかにしてかその悲みを忘れんがためなりと傳ふることのあるを、歴史家は、それは英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に、心づかざる僻事なりといはん。されど凡人に

御。弘徽殿の女
そののかす

得菩提の善
智識

おほけなき

術なき思

もせよ、英雄にもせよ、人の情は同じきものを。當時の秀吉が胸の中を思ひやりては、是非は知らず、傳ふることのまた所以ありと思はざるを得ず。華山天皇は愛妃を先だてし御悲みに堪へ給はざりしその機に乗じて、藤原道兼がそゝのかし參らせしかば、乃ち宮中を遁れ出でて、出家せさせ給ひき。後にぞ道兼が欺けるなりと知りて、悔しく思し召しけると、古史には記したるが、果して法皇は悔み給ひけんや。かれ佞臣が欺けるなりとは知りつゝも、それも得菩提の善智識、亡き人のためにはよくこそ朕を誘ひけれと、逃れ去る道兼を見送りて、満足して御髪は下し給ひけんかし。おほけなき例を引くにはあらねど、今我が身に思ひしむにつけて、更めて昔の跡を顧るなり健かなる者は日々の務に勵みて、その悲みを忘るべし。悟ある者はせんなき世の習と、術なき思に沈まざるべし。あはれ身も心も弱き者の、奮ひ起ちて働き勞るゝことも得せず。さりとして一筋に

思ひ諦むることならず。つくづくと日ごとに同じ歎を繰返すかな。

— 國文學史講話 —

九 晩春の別離

島崎藤村

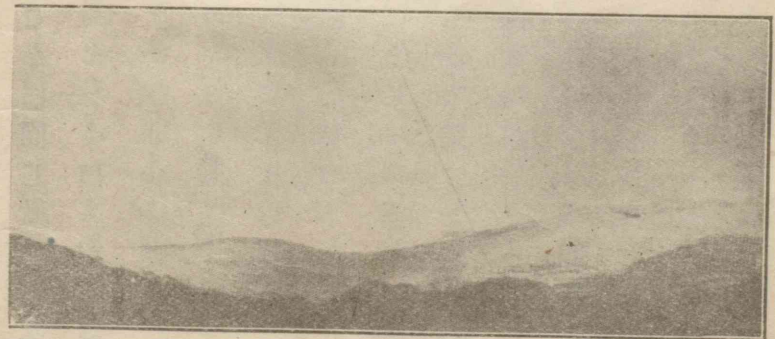
時は暮れゆく春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のわかれより
さらに長きはなかるらん。

君をおくりて花ちかき
高樓までも來て見れば、
みぢりにまよふ鶯は
霞むなしく鳴きかへり、

佐保姫の春
の車駕

しろき光は佐保姫の
春の車駕を照らすかな。

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでて、
おもへば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき、
ひがし膳吹の山高く、
西には比叡、比良の峰、
日は行きかよふ山々の
ふかきながめを伏仰ぎ、
いかにすぐれし想をか
沈める波に湛ふらん。



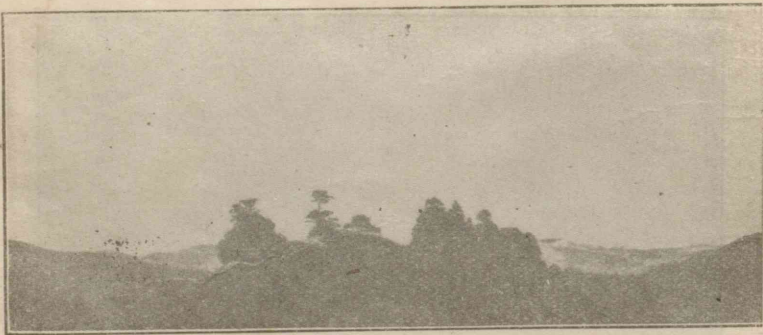
(一のそ) 湖 琵琶

(一) 白河法皇

春は八るの
たす良の枕詞

八は二部...
たす良の枕詞

ながれはむなし、法皇の
夢はるかなる賀茂の水。
水にうつろふ山城の
みやびの都ゆく春の
かすめる姿見つくして、
畿内にせまる伊賀伊勢の
鈴鹿の山の波とほく
海に落つるを望む時、
いかによろづの恨をば、
空行く鶯に窮むらん。



(二のそ) 湖 琵琶

元明天の星哉 春に 淳仁 雅徳 兄 行

奈良の都に尋ね入り、
としつき君がこひしたふ

御堂のうちに遊ぶ時、

ふるき藝術の花の香の

伽藍の壁にのこりなば、

いかに韻を身にじめて、

深き思にしづむらん。

（呻吟）

さては秋津の島が根の

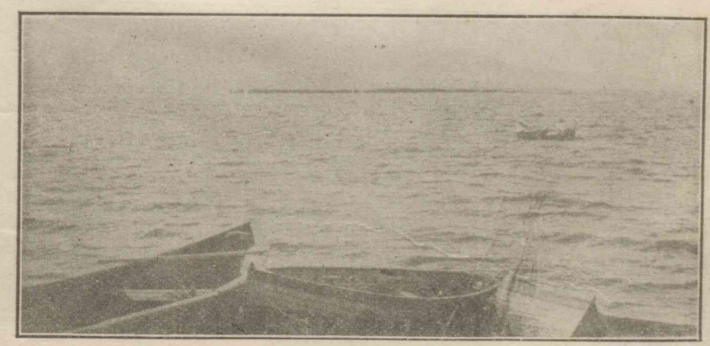
南のつばさ紀の國を

めぐりて進む黒潮の、

鳴門に落ちて行く處、

あまぎは遠く白き日の

（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）



比 良

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

光をもらす雲裂けて、
目にはるかなる遠海の
波のををるを望む時、
いかに胸打つ音たかく、
君が血汐のさわぐらん。

または名に負ふ歌枕

波に千とせの色映る

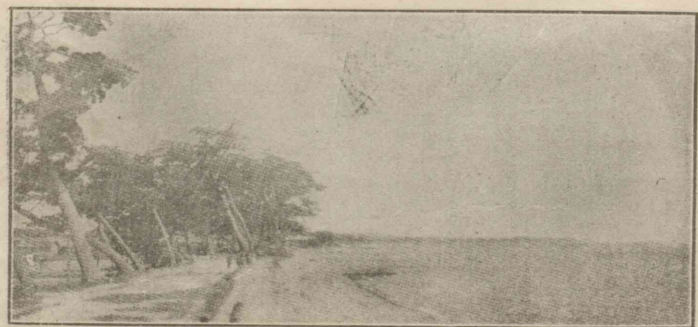
明石の浦の朝ぼらけ、

松よろづよの音にひびく

舞子の濱のゆふまぐれ、

もしそれ海の雲落ちて、

淡路の島の影くらく、



明 石

霧

霧のうちに鳴きかよふ
千鳥の聲を聞く時は、
いかに浦邊にさすらひて、
遠き昔をしのぶらん。

げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯にながるゝ白波を
あげんとすらん。よしさらば、
旅路遙かに野邊行かば、
野邊のひめごと、森行かば
森のひめごと探りもて、
高きに登り、あめつちの



子 舞

あなただけの
人々を
うらみ
うらみ

朽ちせぬ琴

もなかに遊び、大川の
ながれをきはめ、山々の
神をもよばひ、谷々の
鬼をもおこし、歌人の
魂をも遠く返しつゝ、
清しき聲をうち揚げて、
朽ちせぬ琴をかきならせ
さらば名残は盡きずとも、
たもとをわかつゆふま暮、
見よ、影ふかき欄干に、
けむりをふくむ藤の花。
北行く雁はおほ空の



島 路 淡

霞に沈み鳴きかへり、
彩なす雲も愁へつゝ、
君を送るに似たりけり

あゝ、いつか又相逢うて
もとの契をあたらめん。
梅も櫻も散りはてて、
すでに柳は深みどり、
人はあかねぞ、ゆく春を
いつまでここに留むべき。
われに惜しむな、家苞の
一枝の筆の花の色香を。

藤村詩集

煌々

群陰皆影を
伏す
有象無象

詩的情緒

一〇 三つの眺

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破せられるが、月輪は万象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない。清涼の光である。皎潔無垢崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じず。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界

九十九年(永久に)

女子新國文 卷七

四六

(一)賀茂真淵の門人荷田蒼生子の歌

を照らす月光の、人の胸懐にしみ渡ることは、恰もその影の、千草の露の玉ごとに宿るやうなものである。打向ふ月は一つの影ながら、浮ぶは千々の思なりけり。である。

感吟

昔から今まで
古往今來

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟咏した詩歌の感吟は、世界各国の文學に充ち満ちて居る。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。この冷たい光が、古往今來どれほどの暖みを人間に與へたか、又現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

乾坤を一つにす
(二)新編古今集、僧仙覺の歌

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同じ色に埋められる。花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山。といふやうに、眼に入る物、悉くその下に包まれてしま

西三降れば梅
花を咲かす
わさてふらさ

(一)唐の詩人白樂天の句
廣寒宮裏
月の世界
瓊玉を敷く

對照の妙

ふ。三千世界銀成色。十二樓臺玉作層。の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り紛々と飛んで、たゞ一條の川水を残して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々の眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものである。一年中蓮の花の咲いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど楽しいものではなからう。雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春

雪や氷かこま
みらん梅

一〇 三つの眺

四七

の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのもうれしい。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺は、その皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、みな花に基づいたものである。

(一) 一年ふれば齡は老いぬしかはあれど、花をしなければ物思もなし。
(古今集、藤原良房)

(二) 新古今集、康資王の母の歌。

(三) 古今集、清原深養父の歌。

(四) 謡曲「葛城」の句。

古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はたゞ花をし見れば物思もなし。といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。
 月雪花三つの眺には、各その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことが出来ぬ。

やま櫻花の下風吹きにけり

木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪にたとへたのである。

ふゆながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し吳山の雪、鞋はかんばし楚地の花、肩土の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。
 これは雪を月と花とにたとへたのである。

かほりめな
月に花を愛して雪を賞てぬ人も

七
後日
九月十三日

花を賞して月を愛せぬ人はない。月、花を愛して雪を賞てぬ人もない。

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉されてゐる極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人に、は寸紅の目を楽しませしめるものもない。又これに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見たことがない。ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人の、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は、古人の歴史が加つて一層の感興が増す。世々を経てながめし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照らす鏡である。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。人生の感は

(一)伊藤仁齋の歌。
(二)唐の劉廷芝が「代悲白頭翁」の詩中の句。

天。あまのつら

月は東に日は西に

花を見て益、繁く、雪を見て愈、多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたるよ。いかに多くの追慕を我等に催さしむるよ。

一一 日本趣味の特長 河上肇

(一) 荒海や佐渡に横たふ天の川
(二) 春雨や人住みて煙壁を洩る
(三) 易水にねぶか流るゝ寒さかな

などの俳句を誦してゐると、僅々十七音の中に、一幅の畫圖が歴々として眼前に浮ぶ。これが純粹の日本趣味で、實に世界獨得のものである。僅々十七音より成る詩形は、西洋諸國いづれの國に於ても、到底見出すことの出来ないものである。また古いところの俳句には、多少禪味がこもつてゐる。一音をも發しない禪學の如きは、普通

(一)芭蕉の句。
(二)蕪村の句。
(三)蕪村の句。
禪味

の西洋人の、いかにしても解することのできない微妙な性質を持つた學問である。

我々日本人は大建築を有せず、科學を發明せず、機械を發明しない代りには、西洋人の有してゐない茶室を有し、禪學を有し、俳句を有してゐる。我々は西洋人が我々の有してゐない多くのものを有してゐるのを見て、直ちに彼等を偉い人種であると驚歎してしまふ傾向があるが、何も眞の評價は急ぐには及ばぬ。よく見れば、彼等も亦我々の有する多くのものを有せずにあるのである。

西洋式ではすべて物を分析して、簡単な單位に還元する流があるが、かゝる簡単な單位は、それ自身獨立さしては意味をなさぬから、自然の結果として、多數の單位を集めてその全體の上に意味あらしめようとすることになる。そこで分析の結果として、綜合といふことが起る。しかしその綜合は、分析を経た後の綜合であるから、

綜合

日本流の、最初から餘り分析を試みず、物を一纏とするのとは、甚だしく趣の違つたものである。

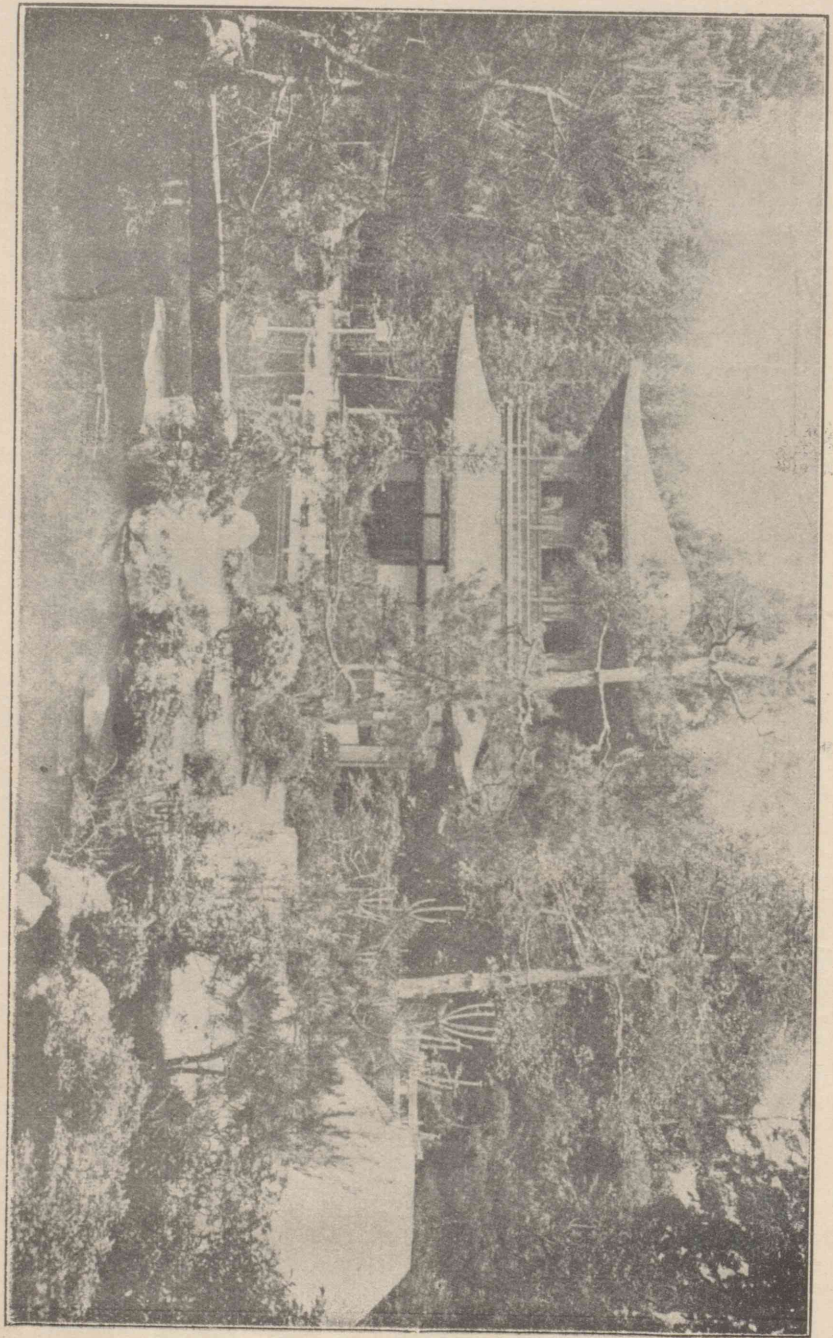
まづ手近なところから二三の例を擧げてこれを説明すると、彼の盆栽の趣味の如きは、全く日本の趣味である。分析もない代りに、同じ單位のものを集めて、集方の上に趣味を出したといふ性質のものでもない。たゞ一本の樹なら樹を、幹と枝と葉と、自らこれを一纏にして見て、そこに千年の星霜を経た巨樹大木の趣を味はふといふわけである。菊花を賞するにしても、根もとに附いた葉までも見棄てずに、幹なり葉なり花なりを一纏にして賞するのである。然るに西洋にはかくの如き意味の盆栽はない。菊花を賞するにしても、最も美しい部分の花だけを切離して賞するのである。随つて、ただ一つでは面白味がない。成るべく澤山にこれを集めて、然る後に全體の上に何等かの面白味を感じ、見事さを味はふのである。

ところ

左右均齊

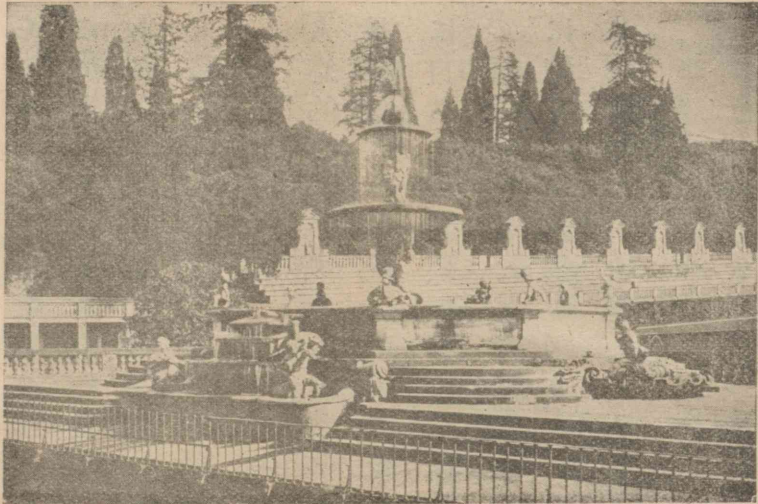
庭園の造方にしても、西洋流では一本々々の木を離してしまつてゐる。それ故、たゞ一本の木を見たのでは何の面白味もないが、その代りに西洋人は、その一本々々の木を、一定の間隔を置いて行儀正しく植込み、かくの如くにして、全體の上に何等かの面白味を出してゐる。だから自然の結果として、西洋の庭園には左右均齊といふことが原則になつてゐる。然るに日本固有の庭園には、さやうな人為的の子供らしいところは全くない。京都で言へば、金閣の庭にしろ、銀閣の庭にしろ、いづれも左右均齊の主義を採つたところは一つもない。山川、池澤、草木、巖石、自然に相集つて自ら絶景を成せる深山幽谷の状を、そのまま一纏にしてこれを縮圖したものが、日本の庭園である。人為的の分析もなければ、人為的の綜合もない。

この意味に於て、日本趣味は實に自然的であるが、これと同時に、他の意味に於ては實に人為的である。全體に於て自然の形を存し



銀閣

組成分子



純 歐 風 の 庭 園

ようとする點に於ては實に自然
的であるが、全體に於て自然の形
を存しながらも、これを美ならし
めるがために、その組成分子に甚
だしい人爲を加へ、なほその人爲
の跡を蔽はうとするが故に、その
組成分子に對しては、種々無理な
注文が、全體のために要求される
こととなる。金閣の庭にしろ、銀閣
の庭にしろ、松の木一本、松の枝一
枝が、決して思ふがまゝに手足を
伸してゐるわけではない。全體の
調和を保つがために、或は枝を切

られ、或は幹を曲げられつゝ、甚だ窮屈な思をして生を保つてゐるのである。盆栽となつた松にしても亦同じことであつて、決して思ふ存分に伸びたものではない。西洋人が見て、いかにもひねくれた人爲のものだと思ふのも、この點から言へば無理はない。

しかし余をして言はせると、西洋の庭園こそ、或意味に於て甚だ人爲的のものである。勿論個々の木は思ふ存分に伸びてゐる。山なり原なりから抜いて来て植ゑたまゝである。この意味に於ては實に自然的で、各個の樹が自由を享受してゐる。けれどもこれ等個々の樹を集めて一つの公園としようとすると、西洋式に行けば、そこに驚くべき人爲が加り、またその人爲の跡を蔽はうとせず、いかにも露骨にこれを現してゐるのである。

—祖國を顧みて—

自修文

一二 あゝ尊い美の國よ

(1) Panorama. 觀る者の周圍を圍くかこんだ大畫布につづいた光景をあらがき、實物のやうに見えらるやうにしたもの。

(2) Java.

(3) Emerald. 濃く紫色。

敦賀から横濱までの途中は、美しい自然のパノラマの連鎖であつた。その自然を、人間の愛らしい手で——祖國のために立派に奮闘し、また平和な労働の中で美しい完成の境にまで到達することの出来るので、調和があつて、あてやかな花園につくり變へたのだ。日本の稲田はちやうど美しいジャワの稲田のやうに、すべてを包む緑色の中でも、殊更媚びるやうなエメラルド色をしてゐる。そして稲田といふよりは、花園といふ感じを與へる。私はまる一日汽車に揺られたが、その間に自分の眼は歡喜と驚嘆に満たされた。なぜなら、目の前を過ぎるものの中で、一つとして美しくないものはなかつたからである。この國には、空地も、荒れた土地もない。ここでは、人々が父母を慕ふやうに土地を愛し、また尊重し、決して等閑に附するやうなことはない。そして、その土地が見るかげもないあはれな姿ではなくて、最も立派な姿をして出現するやうにと祈る。このことを、日本のどんな土地でも語

(1) Edgar Poe. アメリカの詩人、小説家。(四曆一八〇九年—一八四九年)

(2) Landshaft Garden.

(3) Charming. 人を惑はすやうな。人をみするやうな。

技巧的 たくみをつくしたものを。

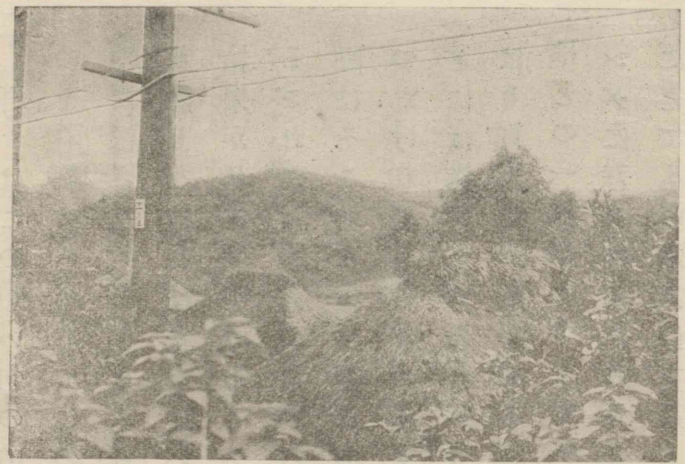
(4) Ribbon.

唐草模様 つる草のさまざまはふやうな形のもやう。

らずにはゐない。
エドガー・ポーは、いつかランドシャフト・ガーデンといふもの
の設立を夢見たことがある。それは、自然といふものを一つの大
きな庭園に作り變へようとしたのだ。尤もかういふ企が或國民
によつて實現されるものとは、彼は期待してゐなかつた。まして、
彼がそのチャーミングで不思議なお伽話を書いてゐた當時、今
言つたやうな企が東方の一國民によつて實現されてゐたとは、
彼の思ひ及ばないところであつた。見よ、ここに一つの橋がある。
それは繪のやうに技巧的ではあるが、優美で輕快に出來てゐる。
しかも立派に實用品となつてゐる。またそこにはリボンのやう
な小路があり、彼處には普通の道路がある。そしてそれは少しも
汚くなつてゐない。又その間には、唐草模様などを彫刻した小さ
な家が散點し、これ等の田舎家には、屋根の中央にあてやかな紫
色の菖蒲の花が咲いて、空中庭園をなして居るのさへある。

(1) Oasis. 沙漠中にある沃地。

(2) Motto. 格言。信條。



(谷々土保) 根 屋るけ 咲 蒲 菖

日本の人はかうして祖國の爲に
盡しながら、その求めるものを求め、
世界に於ける一つの孤島を守り、こ
の一つの孤島を沃土としてゐる。そ
して、その純潔な歡喜に酔つてゐる
ほどであるから、よし敵であつても、
自分が敵であることを忘れて、日本
の爲に喜ぶであらう。
日本には昔の三偉人に關する有
名なモットーがあり、それが三つの
俳句に詠まれてゐる。彼等は信長と
秀吉と家康だ。信長は言つた、啼かぬ
なら殺してしまへほとゝぎす。秀吉
は言つた、啼かぬなら啼かして見せうほとゝぎす。家康は言つた、

「啼かぬなら啼くまで待たうほとゝぎす」と。

吾々はこの短い句の中に、三人の性格がはつきりと出てゐるのを看取する。そしてこの三人の性格は、いづれも日本人の國民性に根ざしてゐる。日本人はどんな事があつても、自分の意志を貫徹しなければ止まない。けれども日本人は、自然の成行とその結果が凡そ判つてゐるさへすれば、いつまでも我慢強^{がまん}く待つてゐる。これが日本人の最高の徳で、吾々が見る日本人のすべての美點はそこから發する。日本人は支那人と朝鮮人から畫の道を習つた。けれども日本人は支那人や朝鮮人を先生に仰いでゐることは満足してゐなかつた。日本人はそれが繪畫であつても、やはり日本式に歌はせることを忘れなかつた。だから日本の繪畫はどの一枚をとつても、みんな歌つてゐるやうだ。そのチャイミングに吾々ヨーロッパ人は酔はされるばかりである。詩を作ることでも、日本人は支那人に學んだところが多い。しかも日本の

MOORE W.
ロシヤの舊都として名高い處。

生の喜
この世の中に
喜きて居る

詩は、五句の短歌にしても、三句の俳句にしても、そこには日本といふものの特色が含まれてゐる。自由で廣々とした港をもつ横濱、美しい遊園とくつついてゐる東京のさわがしい市場、鎌倉の平つたい海岸と大佛のほとりの緑濃い森、立派なお寺と大きな楓と苔の多い櫻の古木に魅入られる日光、日本のモスクワである京都、その都會にはたくさんなお寺があつて、いつも鐘が鳴つてゐる。その他の到る處に於ても、日本は明るくて鮮な面をして、私を眺めたり迎へたりした。日本の詩人や作家と話をしても、上野公園へ私を案内してくれた純朴な車夫と話をしても、お婆さんと話をしても、あどけない女中とむだ口を叩いても、その他私のお話相手になつた誰でも、日本のすべての男女の中には、人間としての品と大きな生の喜を感じた。この生の喜は、日本人にとつては、もう死を恐れないほど純一で、且深刻なものである。日本人はちやうど、小川や大きな川が自然に流れて大海に注ぐやうに、

祝福する
他人の幸福を
よるこびねが
ふ。
(一)ロシアの詩人
コンスタンチ
ン・バリモン
ドが日本へ來
遊した時に來
つた詩や短文
を集めたもの

襟を正す
そより立つ
しぶき
し
おどろく
をりはへて

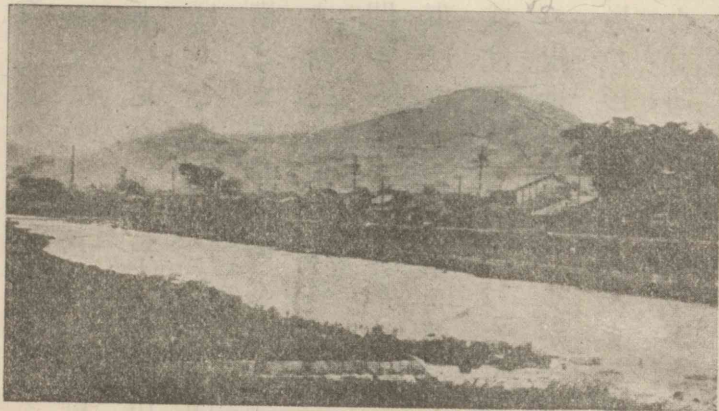
極めて落着き拂つて、死を迎へてゐる。
あゝ尊い美の國よ。魔のやうな國よ。私はお前を祝福する。この國では私も幸福であつた。どんな悲みでも、それをすぐ美化し詩化し得られるのはこの國だけである。

—尾瀬敬止譯、日本を歌へるによる—

一三 比叡山に登る 三宅 花園

何となく襟も正さるゝ大杉の並木、檜のそより立てるあたり、梢は靄の立迷ひて細き雨のやうなるが、横しぶきに面を掠めぬと見れば、一團の雲となりて、湖水のかたに下りたち行く。足もとにこの雲を見て、なほ峰へくと分登るほど、おどろくしく聞ゆる谷川の音のあたりは、白雲もて埋るゝも、梢の少しばかり現れしは、杉原にやあらん。時鳥のをりはへて啼くに打續きて、鶯のも、囀のほが

比叡山ヨリ湖を見る
大石波路遠
白霧山深鳥聲
道遠の雲井けるけこ
深山路に巨とも圍なる
鳥の聲かな



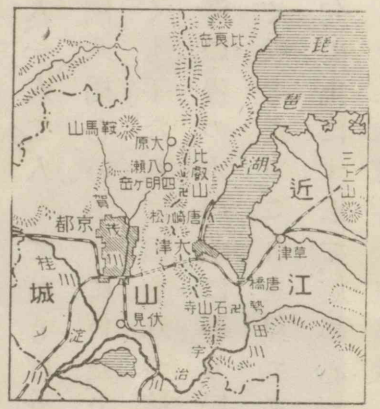
比 叡 山

らかさ。暫し心とられてふと心づけば、
「またとも聞かぬ鳥の聲かな」とて、父の
詩の結句を補ひしといふ才女の、まこ
とに深山幽谷のさまをいひ得つるか
な。いまだ鶯も歌ふほどの境は、山も浅
かりけり。ひたすら浮世はなれて覺え
し我が心も浅かりけり。またく愉快、快
樂などいふは、浅き心のさするわざな
りけり。この鶯の聲は、た浮世のものな
るべし。聞く心の迷には、花も目に浮び、
香もしのびつべし。ゆかしといへこの
谷川の響、大杉の風にもそよがず立つ
さまには、いかで及ぶべき。いでや、なほ

かよふ

登り登りて山奥へと行くまゝに、いや森々と生ひしげる木立の、日の光もゆるさず、松にかよへる、杉に似たる苔、一二寸の丈にのびて、ふむ足ぬめるやうなる山そば道、崖道、丈なる草間を踏開きて行けば、ふと明らかにあたり開けたる心地して、かの見ゆる頂上までと、横ざまに歩みめぐらして頂上に出づれば、石の垣ゆひて、中央に像すゑたり。こは傳教大師の皇居を守り給へるなりとぞ聞く。純友將門の名におへる石も、端つ方に在り。たゞずみて四方を見れば、京都市はマツチの箱を並べしやうにて、いさゝか大きに見ゆるは、某院或は某堂とあらはなり。一筋見ゆる賀茂川は、少女の髪に飾る丈長の銀紙を張りたるがごとく、きら／＼と日の光に榮えたり。鞍馬の峯の杉にもや、多くまろかなる山の青々とつらなれる中をぬきて、少し凹凸の見ゆるが、この山と相對していと高く、天狗の行通ふなどいふを思ひ寄せて、をかしと思ふ。かの銀紙の末は銀絲とほつれ

心あてに



て亂るゝ二筋の流は、彼方に末遠く山間に消ゆるを、攝津、河内の方なりと見つゝも、次第に右よりうしろに首をかへせば、琵琶湖の湖のこれはさすがに大なりけり。山の半ばをめぐりて、彼の八景のかしこぞ唐橋、かしこぞ唐崎など、ほの見ゆるもあり、心あてにそことおぼゆるもあり。三上山はいと小さくなりて、比良の高嶺ぞ、向ひざまにそゝり立つ。ひとわたり見て眼をかへせば、八瀬、大原の里は貝殻の三つ四つ砂上に伏せるが如く、右の方又おしひらけたる平地は、かのマツチ箱の正しく置かれたる京都市なり。二たび三たび身をめぐらして、四明ヶ嶽の名に負かず、パノラマのやうなる景色の目にさはるものなきを、たゞく面白しと見る。

一三 比叡山に登る

六五

長年の内(五)にありけり
伊勢物語
平安朝初期

女子新國文 卷七

(一)碧海郡。知立町の東。

かれひ

唐衣

一四 東下り

昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあらず、東の方にすむべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とはいへる。その澤の邊の木の蔭におり居て、餉かひくひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。これを見てある人の曰く、かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め、といひければ、詠める、

唐衣きつゝ馴れにしつましあれば

はるく、來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人、餉の上に涙落してほとびにけり。行き行き

(一)安倍郡と志太郡との境。



在原業平(不退蔵)

て駿河國にいたりぬ。宇津の山に至りて、我が入らんとする道は、いと暗う細きに、蔦、楓はしげり、もの心細く、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。かゝる道はいかてかいます。といふに見れば、見し人なりけり。京にその人の御許にとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山邊の

うつゝにも夢にも

人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつご

もりに、雪いと白う降り。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪の降るらん

その山は、ここにたとへば、比叡山を二十ばかり重ねあげたらん程

鹽尻

にしてなりは鹽尻のやうになんありける。なほ行き行きて、武藏國と下總國とのなかに、いと大なる河あり、それを角田河といふ。その河の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ。日も暮れなん。といふに、乗りて渡らんとするに、皆人もわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらずさる折しも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鳴の大きなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひければ、これなん都鳥。といふを聞きて

名にしおはばいざこと問はん都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

と詠みければ、舟こぞりて泣きにけり。

—伊勢物語—

一五 小松内府その一

- (一) 太政大臣平清盛。入道して淨海。
- (二) 筑後守平貞能。
- 神拜
- (三) 清盛の叔父忠正。
- (四) 崇徳上皇。
- (五) 重仁親王。
- (六) 清盛の父忠盛。
- (七) 鳥羽法皇。
- (八) 藤原信賴。
- (九) 源義朝。

太政入道は、かやうに人々數多縛め置きて、なほ心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黒絲緘の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしくぞ見えし。貞能と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋緘の鎧着て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、この事いかと思ふぞ。保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一宮の御事は故刑部卿殿の養君にてましまししかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて先をかけたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となりたりしにも、入道隨

(一)藤原經宗
(二)藤原惟方

(三)藤原成親

(四)藤原師光。入

道して西光と

いふ。

天智にんげん

讒奏申上りし

(五)後白河法皇

(六)平重盛の邸

分身を捨てて兇徒を追落し、經宗、惟方をめし縛むるに至るまで、君の御爲にすてに命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかてかこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、さらずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者どもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。とこそ宣ひけれ。主馬判官盛國急ぎ小松殿へ馳参つて、世は早かう候。と申しけれ。

丸洲。昔のしんへ

(七)清盛の邸



ば、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんな。とのたまへば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長を召され候上は、侍どもも皆打立つて、ただ今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひけれ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせうとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせんとこそ議せられ候ひつれ。と申しければ、大臣、何によりてたゞ今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしき事もやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

さやめく

門前にて車より下り、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に思ひ／＼の鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外、諸國の受領、衛府、諸司などは縁に居こぼれ、庭にもひしと並み居たり。旗竿ども引側め引側め、馬の腹帯を固め、冑の緒を締め、たゞ今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直垂に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

面はゆう

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうずるやうにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向はんこと、さすが面はゆう耻づかしうや思はれけん、障子を少し引立てて、腹巻の上に素絹の衣をあわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物のすこし外

粟散の境

れて見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ申さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

一六 小松内府 その二

やゝあつて入道宣ひけるは、成親卿が謀叛は事の數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらはらとぞ泣かれける。入道、さていかにやいかに。と呆れ給へば、やゝあつて大臣涙を抑へて、この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覚え候。人運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり。又御有様を見参らせ候に、更に現とも覚え候はず。さすが我が朝は邊地粟散

破戒無慙

の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根尊の御末、朝の政を掌らせ給ひしより、この方、太政大臣の官に至る人の、甲冑カウをよろふこと、禮儀を背くにあらざりや。就中出家の御身なるに、法衣ホウイを脱捨てて、忽ちに甲冑をよろひ、弓箭ユミヤを帶オビしまし、まさんと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんぞ、かたく、恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。

一 許由。
二 伯夷、叔齊。
蓮府
槐門

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王土に非ずといふことなし。さればかの、潁川エビの水に耳を洗ひ、首陽山シュウヤウに蕨アヅキを折りし賢人も、勅命背き難き禮儀をば存ずとこそ承れ。いかにいはんや、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領とな

進止

傍若無人

佛陀の冥慮

つて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け参らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんぞ。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪サカシを鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れども、當家の運命未だ盡きざるによりて、事すでに露れ候ひぬ。その上仰せあはせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈奉公の忠勤を盡し、民の爲には益撫育マツカの哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮メイリョに背くべからず。神明、佛陀感應あらば、君も思し召し直すこと、などか候はざるべき。

一入再入

これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し参らせ候べし。その故は、重盛はじめ叙爵（叙爵）より今大臣大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆（千顆）萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすてに不忠の逆臣となりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨（辨）へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供をも仕るべからず、又院中をも守護し参らすべからず。

富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきに非ず。富貴の家には祿位重

疊せり、再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細うこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候べき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂目に逢ひ候重盛が果報のほどこそ拙う候へ。たゞ今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易い御事にこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめくと泣き給へば、その座に並み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

—平家物語—

一七 平家の都落

高山林次郎

凡そ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり、あはれにも、また目ざましきはなかるべし。

南都（一）の餘燼未だ冷めず、墨股（二）の勝鬨なほ響きぬるに、信越俄（三）に雲

(一) 治承四年十二月、平重衡、父清盛の命を受け、奈良東大寺興福寺を焼く。
 (二) 養和元年三月、重衡等、源行家を尾張國墨股に討つて破る。
 (三) 養和元年、平氏廢、義仲に破らる。

(一)壽永元年七月、義仲延暦寺に據る。

(二)み吉野の山のあなたに宿もがな、身のうき時のかくれ家にせん。(古今集、讀人不知)

(三)壽永元年七月、義仲を避けて平氏西海に走る。

亂れて、木曾の五萬騎はや比叡の(一)あなたに充ち満ちぬ。宇治、淀の備脆くも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きを、み吉野の山のあなたに隱家はなきか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國のみゆきに、一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人のあはれの限りもなう。復歸り來べき都としも思はねばにや。六波羅、池殿、西八條以下一門譜第の邸宅、宿



平家権日春(靈) 家現權日春

一炬の煙

鳳闕
椒房

(一)「ふる里を焼野が原とかへりみて、末も煙の波路をぞ行く。」(平家物語、平經盛)

直衣
束帶

さすらふ

房、京白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となしはてぬること、あわたゞしかりしか。

ここに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元この方、天下の榮華を盡したる花の都の故郷を、焼野の原と顧て、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣、束帶の身にも、今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて、弓矢の譽を勵むべき。さても捨難き命や、今こそはうき世なれ。さすがにしのばる、昔



都落(卷) 繪記驗

翠華搖々

身にしむ秋
はあざむか
れず

船 二千五百人

一軍 第三子
清經。明月に
對して笛を吹
き、海に投じ
て死す。

三軍

(二)攝津國武庫郡
須磨町の西。三
月七日。

天皇は六月
ひまわり
2500
x
12500
x
37500人

のさまの夢に入るをばいかにせん。翠華搖々として西に向へば、秋風いたるところ野に満てり。嗚呼、きのふは東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、けふは西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋はあざむかれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなただの空とやおぼしけん、日暮、舳に笛吹く人あり。響はとほく煙波をかすめて、三軍ひとしく耳を欵つ。嗚呼、この時、この人、想果して如何。

— 樗牛全集 —

一八 敦盛最期の事

さるほどに一の谷の軍敗れしかば、武藏の國の住人熊谷次郎直實平家の公達助船に乗らんとて、汀の方へ落行き給ふらん、あつばれよき大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝつて、汀の方へ歩ます

もよぎにほ
ひ
きりふ
重簾の弓
連錢葦毛
金覆輪

まさなうも

るところに、ここに練貫に鶴縫うたる直垂に、もよぎにほひの鎧着て、鍬形うつたる冑の緒をしめ、金作の太刀をはき、二十四さいたるきりふの矢負ひ、重簾の弓持ち、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍おいて乗りたりけるもの一騎、冲なる船を目にかけ、海にさつと打入り、五六段ばかりぞ泳がせける。熊谷、あれはいかに、よき大將軍とこそ見參らせて候へ。まさなうも敵にうしろを見せ給ふものかな。返させ給へ。返させ給へ。と扇をあげて招きければ、招かれて取つて返し、汀に打上らんとし給ふところに、熊谷波打際にて押並べて、むづと組んでどうと落ち、取つて押へて首をかゝんとて、冑をおしあをのけて見たりければ、薄化粧してかねぐろなり。我が子の小次郎がよはひほどして、十六七ばかんなるが、容顔まことに美麗なり。抑、いかなる人にて渡らせ給ひ候やらん。名のらせ給へ。助け參らせん。と申しければ、まづかういふわ殿は誰ぞ。物その數にては候はねども、武

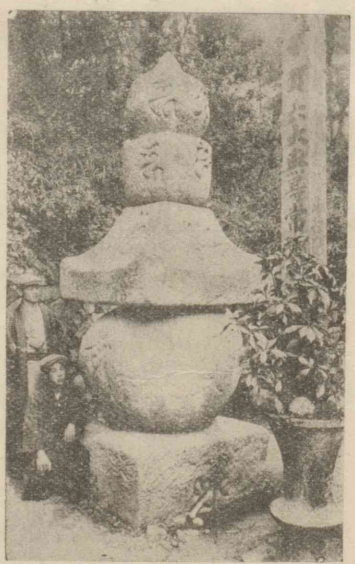
藏の國の住人熊谷の次郎直實と名のり申す。さては汝が爲にはよい敵ぞ。名のらずとも、首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ。」と宣ひける。熊谷、あつぱれ大將軍や。この人一人討ち奉りたりとも、負くべき軍に勝つべきやうなし。又助け奉つたりとも、勝つ軍に負くることもよもあらじ。今朝一の谷にて、我が子の小次郎が薄手負うたるを、だにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲しみ給はんずらめ。助け参らせん。」とて、うしろを顧たりければ、土肥(一)、梶原(二)五十騎許出できたる。熊谷涙をはらくと流いて、あれ御覽候へ。いかにもして助け参らせんとは存じ候へども、みかたの軍兵、雲霞の如くに充ち満ちて、よものがし参らせ候はじ。あはれ同じうは、直實が手にかけて奉つて、後の御けうやうをも仕り候はん。」と申しければ、たゞいかやうにも、とうとう首を取れ。」とぞ宣ひける。熊谷餘りにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺

(一)土肥實平。
(二)梶原景時。

けうやう
とうとう
いとほし

前後不覺
さてしもあ
るべきこと
ならねば

えず、目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべきことならねば、泣くく首をぞかいたりける。あはれ弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生まれずば、何しにたゞ今かゝる憂きめをば見るべき。情なうも討ち奉つたるものかなと、袖を顔におしあてて、さめくとぞ泣きゐたる。首をつゝまんとて、鎧直垂を解いて見ければ、錦の囊に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。あないとほし。この曉、城のうちにて管絃し給へるは、この人々にておはしけり。當時身方に東國の勢なん十萬騎かあるらめども、軍の陣に笛もつ人はよもあらじ。上らふはなほも優しかりけるものをとて、これを取つて



塚 盛 教

見參
大夫
(一)忠盛の子。清盛の弟。

相傳
笛の器量
狂言綺語
讚佛乘の因

(二)源義經。

大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。
後に聞けば、修理の大夫經盛のおと子大夫敦盛とて、生年十六にぞなられける。それよりしてこそ熊谷が發心の心は出て來にけれ。くだんの笛はおほぢ忠盛笛の上手にて、鳥羽の院より下し賜はられしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによつて、持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。狂言綺語のことわりとはいひながら、つひに讚佛乘の因となるこそあはれなれ。

—平家物語—

一九 那須の與市の事

さる程に阿波、讚岐に、平家に背きて源氏を待ちけるつはものども、あそこの船、ここの洞より、十四五騎、二十騎打連れ、馳來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、勝負を決す

尋常にかざ
る
渚

柳の五つぎ
ぬ
舟のせがい

矢おもて
てだれ

小兵
さん候

べからずとて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段許にもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見ると、ころに、舟の中より年の齡十八九許なる女ばうの、柳の五つぎぬに紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出いたるを、舟のせがいに挟み立て、陸に向ひてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。と宣へば、射よとにこそ候らめ。たゞし大將軍の矢おもてにすゝんで、けいせいを御覽せられんところを、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある。と問ひ給へば、てだれども多う候なかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與市宗高こそ小兵には候へども、手はきいて候。と申す。判官、證據があるか。さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。と申されければ、判官、さ

いろふ

らば與市呼べ。」とて召されけり。

與市その頃は、いまだ二十許の男なり。褌に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂に、もよぎ緘の鎧着て、あしじろの太刀をはき、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合はせてはいたりける。ぬだめの鎬をぞ差添へたる。重藤の弓脇に挟み、冑をば脱いて高紐にかけ、判官の御前にかしこまる。判官、「いかに與市。あの扇の眞中射て、かたきに見物せさせよかし。」と宣へば、與市、つかまつつとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、長き身方の御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國に向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これよりとう／＼鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與市重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけ

一定

仔細を存ず

御説

まろほや

矢ごろ



屋

島

ん、さ候はば外れんをば存じ候はず。御説で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷り立ち、黒き馬の太く逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方のつはものども、與市が後を遙かに見送つて、この若者一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。
矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入つたりけれど

(一) 壽永三年。

くしに定まらず
くつばみ

神明

よつびいて
ひやうと放つ
十二束
三ぶせ

もなほ扇のあはひは七段ばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折ふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげ、ゆりすゑて漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一めに並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも、晴ならずといふことなし。與市目をふさいて、南無八幡大菩薩別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向ふべからず。今一度本國にかへさんと思し召さば、この矢外させ給ふなど、心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなりたりけれ。與市鎬を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三ぶせ、弓は強し、鎬は浦ひよくほどに長な

どよめく
源頼義の長子。
址は磐城國石城郡關田から常陸國を賀郡關本に越える途上にある。
音楽に
弟義光は笙の名人であつた。
欽慕
おもひしたふこと。
源頼義及び義家、安倍頼時及びその子貞任と宗任を討つ年(一七二四年)。
源義家、清原家衡及び武衡を討つ年(一七四五年)。
一七四七年)。
執掌
従事したらくこと。

りして、あやまたず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射きつたる。鎬は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出いたるが、夕日にかゝやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家ふなばたをたゝいて感じたり。くがには源氏箆をたたいてどよめきけり。
—平家物語—

自修文

二〇 武士の風流

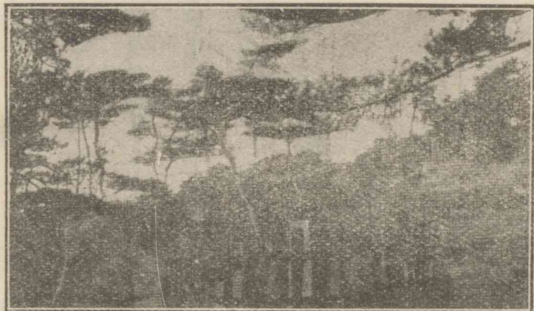
(一) 八幡太郎義家の勿來關外の風流は、詩歌に詠ぜられ、畫圖に入つて、人の知つた事蹟である。弟の義光といひ、兄の義家といひ、武人として音楽に、文學に、その趣味の高かつたのは、後の武士をして愈、欽慕措く能はざらしめた所以であらう。眞に日本武士の典型であつたといつてよろしい。前九年、後三年、邊土の戦に執掌し

ふく風をなこそ
 なこそ地名の勿來とく
 るなどの意をかけた。
 みちもせに散る
 路をせまいほど一面に散る。
 典雅
 ひんよくみやとびやかなこと
 雅懷
 風流なおもひ
 (一)後白河法皇の院宣により藤原俊成撰す。
 (二)天正五年上杉謙信(不識庵)能登七尾城を攻む。時に詠じて曰く、
 一霜滿三軍營。秋氣過雁月三行。更得能州景。遮莫家卿憶遠征。
 (三)學者。天永六

た身の、勿來關外に馬を控へて、

ふく風をなこそその關とおもへども

みちもせに散る山ざくらかな



碁を試みて居ると、賊が入つた。八幡殿の御座ぞ。と言つた聲を聞

何等の典雅ぞ。何等の雅懷ぞ。これは勅撰の千載集に載つた名歌である。能州の陣頭に明月を詠じた不識庵謙信と、前後一對ともいふべきである。

勿來關の
 其(三)大江匡房が、惜しいかな好漢兵法を知らず。と言つたのを聞いて、直ちにこれに就いて學んだといふ話も、貞任滅亡の後、その弟の宗任を家來として、赤心を人の腹中に置いた話も、皆その寛仁大度の英雄たる事を證明するのである。或家に圍

年(一七七一年)没。年七十七
 赤心を人の腹中に置く
 ま心を以て人に接する。
 古事談
 平安時代の末にできた書。古來の傳説を集めた六卷物語。
 征夷大將軍
 上古蝦夷の叛亂を討つ爲に置かれた職。後白河天皇の第四子。三條宮とも高倉宮とも稱す。
 (二)深山の櫻の木
 他、冬の間は他の木と同様に花がなかつた。が、春來り花が咲いて初められた。
 (三)治承四年のこと
 (四)自分は世にもあらはれず、

いて、賊は皆刀を捨てて縛に就いたといふ事が古事談に見えて居る。當時名聲の盛であつた事もこれで分る。單に武勇一點張で、それだけの名聲は得られるものではない。温雅春のやうな徳風の人を感化とせる趣があつたに違ない。後の征夷大將軍が、皆八幡公の子孫であつた事は、その由來の偶然でないことが分る。
 平氏全盛の世、以仁王の令旨を奉じて源氏復興の旗揚をした源三位頼政、或時深山花といふ御題を賜はつて、
 深山木のその梢とも見えざりし
 さくらは花にあらはれにけり
 あはれこの源三位、功名の念は急であつたが、時世は未だ彼に幸せず、宇治橋の一戦に脆くも打敗れて、扇の芝で腹かき切つて死んだ。その時の辭世に、
 埋木の花咲くこともなかりしに
 みのなるはてぞあはれなりける

埋木同様の身
 花の咲くこ
 とに、身の最
 期はまことに
 哀れなもので
 あるとの意
 みのなる
 實のなるに、
 ひかけたので
 ある
 (一)藤原俊成。京
 都の五條に住
 んだ故にい
 (二)山城國徒。
 苦しからず
 さしつかへな
 い
 (三)安徳天皇。
 沙汰
 命令
 さりぬべき
 歌
 てきたうな
 歌の引合
 右のわきで合
 はせる所
 前途程遠し
 云々
 大江朝綱が京

平家の公達には風流のすさびのあつた人が多かつた中に、最も名高いのは薩摩守忠度である。日ごろは五條の三位俊成卿を歌の師として居たが、平家都落の途中から侍五六騎と取つて返し、俊成卿の門をほとくと叩いた。忠度と名のれば、すは落人の歸りたるよ、と内では騒ぐ様子。忠度馬を下つて、聲高らかに、三位殿に申すべきことありて、忠度が参つて候。俊成これを聞いて、苦しからず入れ申せ。とて、門をあけて對面する。忠度、この二三箇年は京都の騒、國々の亂にて、度々参る事も候はず。主上にも京都を出て給ひ、一門の運命もけふあすに盡きはて候。それにつけても、撰集の御沙汰ある事も承れば、生涯の面目に一首なりとも入撰の御恩を蒙らんと存ぜしが、この世にその沙汰なきは一身の歎に候。世静まりて撰集の御沙汰あらば、この巻物の中より一首なりとも、さりぬべき歌選み出で給へ。草の蔭にてうれしく存候はん。といひつゝ、百首ばかり集めた歌集を、鎧の引合から取出して

都七條なる支
 那館に贈つた
 一前、途程遠し
 雲を雁山の暮
 思を馳す。後
 會期遙かなり
 櫻を鴻臚の曉
 涙に霑す。自
 いふ詩を自分
 の境遇を自
 つて少しあは
 のつて歌つた
 云々
 さ、波や云
 さい、波は志賀
 のの枕詞。志賀
 大津で天智天
 皇の宮の跡を
 あるの宮の跡
 を地名の長良
 をかけた
 沃懸地
 うるし塗の上
 に金粉又は銀
 粉をまきかけ
 たもの。
 (一)紀伊國東牟婁
 郡。

渡した。俊成、さてもけふの御出こそ、情もあはれも深く、感涙おさへ難く候。と涙を押へていへば、忠度、さらば。とばかり、馬に乗つて、西をさして行く。前途程遠し、思を雁山の暮雲に寄す。後會期なし、櫻を鴻臚の曉涙に霑す。といふ朗詠の句を誦して落ちて行つた。きのふに變るけふの境遇、俊成もいかにあはれに感じたであらう。さて忠度の風雅の忘れ難さに、その後千載集を撰した時、さ、波や志賀の都はあれにしを
 むかしながらの山ざくらかな
 の一首を、よみ人しらずとして入れた。亡魂はさぞかし喜んだであらう。
 この忠度は、一の谷の合戦に西方の大將軍であつたが、その日の装束は、紺地の錦の直垂に、黒絲絨の鎧着て、黒馬の太く逞しいのに、沃懸地の鞍置いて乗つて居た。岡部六彌、太忠澄はよい敵ぞと、返させ給へ。と呼ばはつて、むづと組む。忠度は熊野育の大力、屈

後の十念
後世の尊に南
無阿彌陀佛の
六字の名號を
十度となへる
こと。

(一)遠江國の歌
人。安政六年
(二)一八九九
年。六十九。
この歌は忠度
を詠じたもの
で、歌を都に
と、身は須磨
の浦に戦死し
た忠度の文を
をかねたもの
を武
ほめたもの。

竟の早業にて、直ちに六彌太を引寄せ、馬上にて二刀落ちて一刀、三刀まで突いたが、二刀は鎧の上で通らず、一刀は口中へ突入つたが、薄手であつた。取つて押へて首をかゝうとするところへ、六彌太の家來が飛んで来て、薩摩守の右の膝を打落した。薩摩守今はかうよと、六彌太を六尺許取つて投げ、靜かに後の十念稱へて、遂に討死したのである。箆に結びつけた文に、旅宿の花といふ題

て、
行きくれて木の下蔭を宿とせば

はなや今宵のあるじならまし

とあつたので、薩摩守の最期と知つたのである。

言の葉の花は都にとゞめおきて

身をばまかせし須磨の浦風

石川依平

芭蕉の句

二二 春の句、夏の句

梅一輪一輪づゝのあたゝかさ
鶯の身をさかさまに初音哉
母方の紋めづらしや着衣始
川下に網打つ音やおぼろ月
矢橋乗る嫁よ娘よ春のかぜ

嵐雪
其角
山蜂
太祇
其角

蓬萊の松に
たてばや會
根のまつ
其角



其角筆蹟

彼岸前寒さも一夜二夜かな
紙鳶買つて子心で憂き雨續
世の中は三日見ぬ間の櫻かな
つばくらや小袖を洗ふ橋の下

路通
召波
蓼太
紫白

さみだれや
ある夜ひそ
かに松の月
蓼太

さみだれやある夜ひそかに松の月

蓼太

蹟筆太蓼

雲雀より上にやすらふ峠かな
長持に春かくれゆく更衣
五月雨や色紙へぎたる壁の跡
二人して掬べば濁る清水哉
玉あらば玉洗ひたき清水哉
小襪より針ひねり出す袷哉
時鳥啼くや木曾路のおそ櫻

芭蕉
西鶴
芭蕉
蕪村
江村
几董
素山
徳川
山

たゞの時も
よしのはゆ
めのさくら
かな
西鶴

只の時もよしのはゆめのさくら

西鶴

蹟筆西鶴

しづかきや岩にしみ入る蟬の聲
田植女の泥手洗うて小櫛哉

芭蕉
紫人

二二 百花譜

大町桂月

寥廓
點塵
局に對す
子を下す

郊原一路満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして、雲色哀しみ、西風冷やかにして、酸たる鳥聲秋の恨を語る。馬の嘶く聲まづ聞え、小歌聞えて近づくを見れば、若き農夫馬背にあり。手綱は鞍にあづけたるまゝにて馬の自ら歩むは、熟せる路にや。鴉飛びつくして四面寥廓たり。ふと願れば、招く尾花の末に、一團の大月明らかなり。雀の聲滑なる冬の日和、日影暖に圓窓を射て、火鉢の火も消えかかれり。室淨うして點塵なし。床の間の俗氣なき畫幅の下、水仙三つ四つ露を帯びたり。老人二人靜かに局に對して子を下す聲、時に丁丁として響く。

茅屋
桔槔
機杼

水榭
人籟

流るとしも
なき

流鶯

桃花數株、茅屋を圍みて、鷄聲午なり。桔槔動かずして、一犬門外に眠り、屋内よりは鄙びたる歌の聲、機杼の聲とともに洩來る。
一泓の池水、半ばこれ蓮花白や紅や影を水に落して、水に花あり。健鯉時に躍りて、波文岸に及ぶ。水榭深く鎖して、人籟なし。曉煙垂柳をこめて、日未だ昇らず。

流るとしもなき里川、底は泥なれども水は澄みたり。こなたは小徑行人なく、かなたに椿自ら垣になりて、多く花を着けたり。流鶯時に一聲、思ひがけずも、大輪の花ほとりと水に落ちて、水暫くは文をなす。

村はづれに岐路ありて、問はんとするに人なし。馬頭觀世音の石像、頑として物いはず。側に生出てたる幾莖のをみなへし、なよよとして風にもだゆ。

同伴なくて詩を思ひつゝ、たどる山路、到る處櫻花多し。春風一陣、

遊絲
麥浪

荆莽
清玉を迷らす

空に晴雪をちらし、地に綾の筵を敷く。

池畔の掛茶屋、少女欄に凭り、手をうちて鯉を呼ぶ。稚兒立ちて、袂を投ぐ。棚上の藤花累々としてさがりて、人の頭に及ばんとす。

麥浪に連る一面の菜花、菜花や黄、麥浪や綠、滿地みな色あり。行人絶えて遊絲のどかにかゝり、一双の胡蝶、追逐し、去つて行く處を知らず。

夏の日暑く、山路險しく、喘ぎくくのぼるに、渴を催して、堪難き時、水音聞えていとうれしく、荆莽を排してこれに就けば、急湍清玉を迷らす。一掬、二掬、三掬、漸く蘇生の思をなして、ふと目を注げば、苔滑なる巖の上に、百合の花危げに立てり。折らんと欲して折るに忍びず。立別れんとすれば、滋き水のしぶきに、花涙を含むが如し。

白鷺の小首傾けて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて、柳影長き堤の上、往きかふ人なし。巨蟹はひいでて、泡を吐きつゝ、螯を擧げ

空を挟む

て空を挟む。

馬に食ません料とにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら刈りたる草の一束、背に載せて歸りゆく田舎少女。知りてか、知らずてか、その草の中に桔梗一枝まじれり。

鸚鵡語りつくして日暮れんとす。人を待てどもいたらず。蕭々たる細雨、庭の秋海棠に灑ぐ。

— 春草秋草 —

二三 ワイマールより 藤代 禎 輔

ワイマールは小さき都にて、山水の景勝に富めるにもこれなく候へども、いかにも閑靜にて人氣良く、誠に居心地よき處に候。公園には森の繁れる中を、イルムといふ瀧の川ぐらゐの流ちよろちよろ致居り、その上には鐵の欄干に石柱といふ嚴しき橋もあれど、丸太を組合はせて架けたる風流なる橋もありて、シルレルの腰掛と

(1) Im.
(2) 東京市の北郊王子町にある細流。

通り一遍

(1) Alexander
T. Trippl.
彫刻家。西暦一七四四年—一七九三年)
(2) Apollo.
ギリシヤの神話中重要な神の名。
(3) Johann
Heinrich von
Dannecker.
ドイツ著名の彫刻家。西暦一七五八年—一八四一年)



ゲテ像 (ベリット作ルイマール館蔵)

か、ゲテの休息小屋とか、いづれも普通り保存せられて、古をしのぶ跡到る處に散在致居候。一々委しく點檢して詩作との關係など取調べ候はば、餘程興味ある事ならんが、短日月の滞在にてはそれも出来かね候まゝ、通り一遍の旅客として、目に觸れ候處を御報申上候。けふ第一番に足を運びたるは圖書館に候。この圖書館は、初はゲテが我が書齋にとて自ら設計したる建築の由、珍書奇籍も夥しく、ゲテ、シルレルを始め有名なる人物の彫像、肖像畫など、貴重なる品も數數ありて、今まで文學史の挿畫にて纔かにその倂をしのび居たる名作の實物に接し、トリッペルが靈腕に彫まれたるアポロそのままとの評あるゲテの大理石像、ダンネッケルが妙技を揮ひし

詩聖

ルレルの半身像など、凝然見惚れて案内者に急ぎたてられ、不承不承歩を移すといふ始末、まゝになるならいつまでもここに居て、朝夕これ等の逸品を眺めたしとの念も起り候。圖書館を出ててシルレルの住宅を音づれ候。表よりの見附はさして立派といふ建物にはこれなく候へども、窓の板戸が綠色に塗立てあるさまなど、何となくゆかしき心地せられ候。中に入りて一階二階は梯子段を見しばかり、三階に至りて應接室、書齋、臨終室を一覽致候。一切の裝飾品を取除けて、詩聖が使ひ慣れし文房具、椅子、寢臺、掛額等を据附けあるばかりなれば、至つて質素に候へども、この内に起臥して晩年の傑作を産出しし現場かと思へば、感慨限りなく、腐れ林檎の香を嗅ぎて深更まで



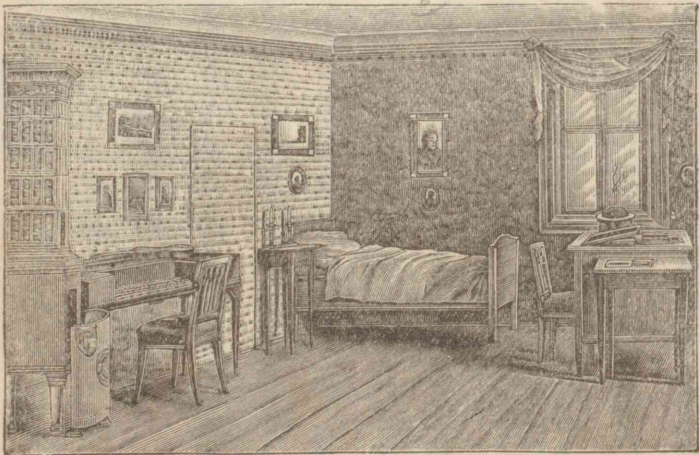
像ルレルシ

(藏箱書圖ルーマイワ作ルケッネダ)

神來の筆

意匠を凝らしたるは、この机の前にやあらん、嗅煙草に睡魔を驅りて神來の筆を馳せたるは、彼の窓の下ならんなど、詩人ならぬ我が身も空想の天地に馳往きて、案内者の饒舌も耳に入らず候。臨終室を見るに及びて、その餘りに狹隘なるに驚き、かゝる偉人がこのむさくろしき部屋にて息を引取りたるかと、そゞろに暗涙に咽び候。

ここを立出で、國君の墳墓に詣で候。これはワイマール代々の君主が遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲーテ、シルレルの棺もこのうち



齋書のルレルシ

薄倖

時めく

薄倖

に安置せられ、木棺の上部は月桂樹の葉にて堆く蔽はれ、ゲーテの頭部には金製、シルレルのには銀製の月桂冠を供へあり候。両詩人の優劣は存命中よりとかく議論ありて、ゲーテ自身も、強ひて一人に團扇を上げずとも、これ程の詩人を二人まで出したりとドイツ國民は喜ぶべき筈なるを、といひたるぐらゐなるが、今この金銀の差別を見て、勿論両詩人の地位若しくは逝去當時の事情に依るとはいへ、シルレルは死後まで薄倖なりとの感を起し候。しかし身を布衣に起して、王者とともに同一石室に葬らるゝは、比類なき名譽とも申すべきか。感歎の餘り、両詩聖の棺の上なる月桂樹の葉數葉を摘取り、記念にとて持歸り候。

これよりゲーテの住宅に赴きしが、さすが宰相の地位にありて當代に時めきし詩人のこととて、シルレルの居宅などは比較にならぬ程廣大なるものなれど、現今の程度よりいへば、極めて質樸に

(Jena.)
ドイツ、サク
セ・ワイマール
の首都。
(Wurzburg.)
ドイツ、バヴァ
リア王國の都



ゲーテの書齋

て、これ亦案外の感に打たれ候。ゲーテの寢室に入りて、シルレルが臨終の際ゲーテも病蓐に就き居りしかば、家人は、シルレルの死を告げなば病氣に障りなんとて秘しけれど、素ぶりに覺りてその實を察し、漣然流涕したりとの一事を思ひ浮ぶれば、両詩聖の交情は東西古今に例なく美しきものなりけりと、感涙禁め難く候ひき。

ナを経てウルツブルグに赴くつもり、行く先々の模様は追々通知

申上ぐべく候。

—帝國文學—

自修文

二四

函館から札幌まで

長田 幹彦

(一)文士。東京の
人。早稻田大
學出身。
交通網
交通機關の縦
横に敷設され
て居るさま。
人文の浸蝕
文明が次第に
入りこんで行
くこと。
(二)國木田獨歩。
原始
はじめ。文化
の進まない
世。

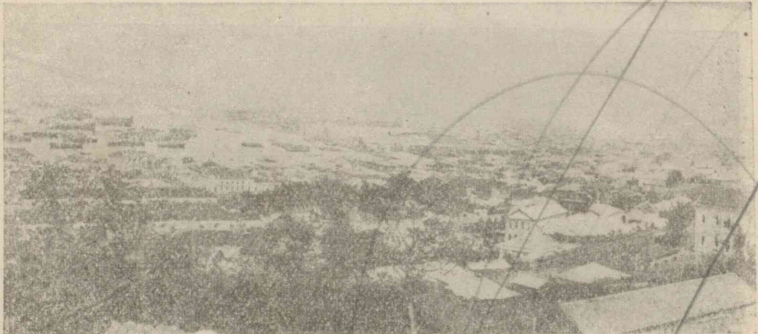
(三)Cosmos.
斧鉞
をのやまさか
り。

北海道も近年は著しく開けて、交通網の發達と人文の浸蝕によつて、自然はさまざまの異なつた形貌を示して來ました。嘗て獨歩氏がゑがいたやうな原始の大森林などは、遠く未開の邊陲へ行つてもめつたに見られません。しかしそれと同時に、彼の地には又彼の地獨得の文明が發達して來ました。そしていかなる破壊の力をもつてしても、到底破壊することの出來ぬ大自然が、今でも到る所に残されてゐることも忘れてはなりません。

夏のさなかに秋のやうな爽な風の吹通ふのも彼の地です。烈日の光は燃えても、その風の底にコスモスの花が斑のやうになつて、なよ／＼と咲亂れてゐるのも彼の地です。千古の昔から斧

針葉樹
松や杉などの
やうな葉が針
のやうな形し
た樹木。
神秘
靈妙で、測り
知ることの出
來ない秘密。

(一)陸奥國下北半
島(斗南半島)
の中央にある
火山。
屹然
そびえ立つて
居るさま。



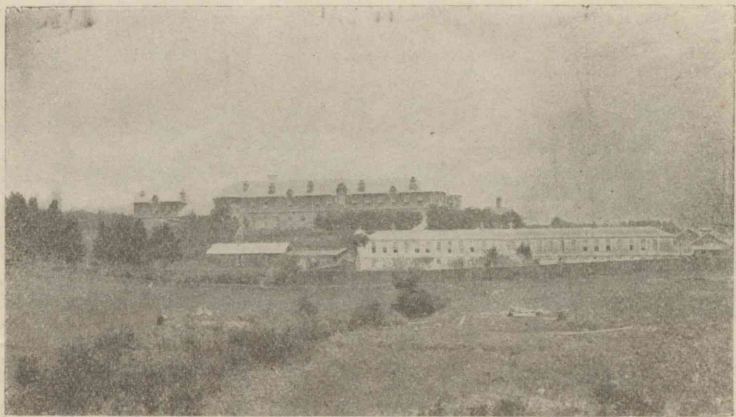
市 街

鉞の音を聞かぬ針葉樹林を旅して歩く面白さは、彼の地をのけて何處に求められませう。神秘な影をたゞへた湖、白樺の美しい森、不思議なアイヌ部落、どこへ行つてもあなた方の限りない興味を惹くものの數は盡きません。是非北海道を一巡していらつしやいませ。

あなたは上野から午後一時の急行に乗つて青森まで行かれる。その列車が青森に着くのは、翌日の午前六時です。連絡船は七時過に青森を出て、十二時十分函館に着きます。恐山の一角が遙かに水平線に没しようとする時、赭色の寂しい斷崖が行手に當つて、屹然として聳え立つてゐるのが、あなたの眼に映じてくるでせう。それは臥牛山の突端で、北海道の

(一)函館の東北約一里。明治元年。大島圭介等が大據りて官軍に抗した處。

(二)Trapnist。キリスト舊教の一派。一四〇年フランソワ族Rochonの伯立。始め、La Trappと云ふ僧院を建てた。



修道院

土の最初の印象を語るものなので。海鷗の群は悲しげな唄をうたひながら、船舷をかすめて翔んで行きます。それを見ただけで気分が一變するのは、誰しも同じことだらうと思ひます。

函館では格別見るべきものはありませんが、その日は湯の川の温泉へ行つて、一泊されるのがいいと思ひます。湯の川までは電車で三十分程で、途中に維新史で有名な五稜廓があります。湯の川は温泉としては極めて貧弱なものです。が、しかしそこから一里半ばかり奥に、トラピストの修道院があります。それは是非一見して置く必要が

放牧 牛馬をはなちがひにすること。

繚亂 もつれみだれで居るさま。撩亂とも書。

あきらか
あきらかに
あきらかに



あります。天氣のいい日には、青々と落葉松の繁茂した傾斜地のいくつかを越えて彼方に、太平洋の落日が美しく眺められます。無言で神の國を開拓してゐる修道尼の生活は、實にロマンチック

その翌日午前七時過の列車で札幌へ向ひます。七飯あたりから、そろそろ急勾配になつて、函館の町がだんぐりと脚下に見え

クを極めたものであります。放牧してある牛の群や、繚亂と咲きみだれたとりどりの草花などは、どうしても西洋の風物としか思はれません。

突兀 高くけはしく
そびえるさま。
なごやか おだやかなさま。

火山原 火山によつて
出来た平原。
荒寥 あれてものさ
びしい。
噴火灣 内浦灣のこ
のと。灣頭は灣
のほとり。

て來ます。大きなトンネルを過ぎると、もう大沼の公園になりま
す。大沼は大沼と小沼の二つに分れてゐて、汽車はその喉首のや
うな所を渡つて行きます。鬱葱とし
た無数の島影は水に落ちて、駒ヶ嶽
火山が異様な姿をして突兀と聳え
立つてゐるのも、内地では見られぬ
景色です。箱根あたりのなごやかな
山容水態に比べると、また十分未開
地らしい匂が残つてゐるところに
價值があるやうに思はれます。
それから列車は寂しい火山原を
下つて、噴火灣頭へ出ます。森から長
萬部までの間は、荒寥とした斷崖の
上を、噴火灣に沿うて駛つて行きます。そこからは海を越えて、遙



大沼公園

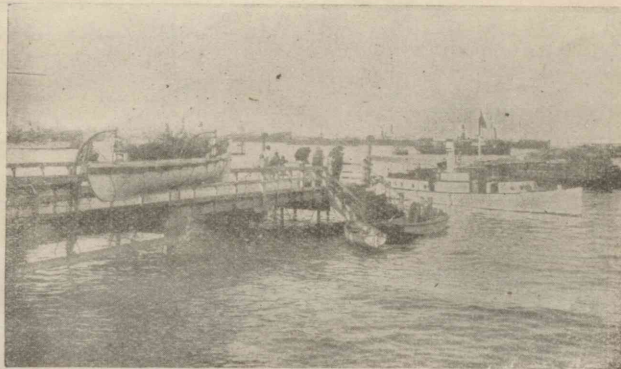
北陸線 滋賀縣の米原
から福井、金
澤、高山を經
て新潟縣直江
津に至る鐵道
線。



後方羊蹄山

かに有珠嶽を眺めることが出來ま
すが、その風光の寂しさは、内地では
僅かに北陸線の一部に、これに似寄
つたところを見出すばかりです。
長萬部から又山地へはいつて、黒
松内や熱郭などといふ開墾地を通
ります。黒松内から四里ばかり北西
へ出ると、壽都の港があつて、追分節
で名高い歌棄磯谷などもその近く
にあります。
蘭越へ來ると、一種の特徴をそな
へた尻別川と、北海隨一の名山、後方
羊蹄山や、いわぬぶりが見えます。開
墾地や伐残された森林帯の彼方に、富士山形の七千尺に近いそ

開拓者
内地から開拓
者の爲に渡つた



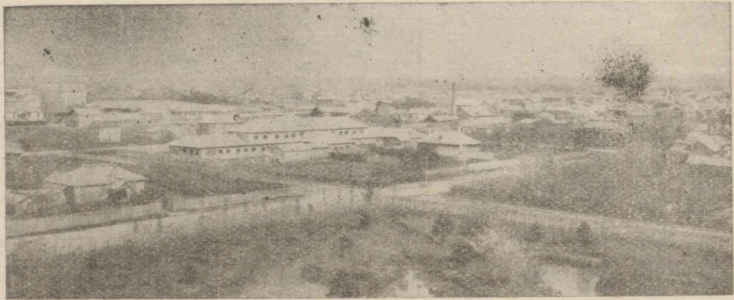
換へて行くのですが、若し隙があつたら行つて御覽なさい。その漁港から汽船で積丹の沖を廻つて小樽へ出るのも面白いと思

小樽からするのが一番いいさうです。俱知安はこの邊きつての町で、開拓者に依つて開かれた、いかにも北海道らしい町です。冬は雪の深いところで、西洋風の板羽目をしたトタン葺の家並の續いたなかを、馬櫓が通つて行く有様は、どう見ても内地の景色ではありません。

鯨漁で有名な岩内へは、小澤から乗

ひます。私は先年この照岸といふ漁場で一週間ばかり鯨漁を見たことがあります。が、葡萄色をした岩礁と、眞白な海の鳥の群は、今だに眼に残つてゐます。

小澤と銀山の間には、北海道で一番長いトンネルがあります。余市は林檎の名所です。蘭島は忍路の濱で有名で、夏は海水浴場の設備もあり、風光も可なり明媚です。そして背面をつむ山々がいづれも禿山で、丸丸としてゐるのが、一種異様な感を與へます。その近くにある毛無山といふところでは、五月までスキーが出来るといふのです。から、不思議ではありませんか。列車は薄暮に及んで漸く小樽に到着し



札幌市街

Sapporo

山石社

(川井やき)

ます。ここは是非一泊して、十分この要港の價値を見る必要が
 あります。日本が北へ向つて開いた唯一の貨物の集散地で、函館よ
 りも更に、重要な意味のある事は御存知だらうと思ひます。
 その翌日は一日札幌で遊んで、一泊なさるがよろしい。札幌も
 決して平凡に見過すことの出来ない町です。圓山公園あたり、遠
 くは定山溪ぢやうざんけいあたりも見のがしてはならないこの附近の名所て
 す。

—夏の旅—

二五 妻の眞心

佐々木信綱

つぎねふ

馬より行く

音のみし泣
かゆ

つぎねふ山背路やましろみちを、

人づまの馬より行くに、

おの夫の徒歩より行けば、

見るごとに音のみし泣かゆ。

そこもふに

まそ鏡

(一)大和國高市
郡持統文武
居天皇の宮

うら若

そこもふに、心しいたし。

たらちねの母が形見と、

わが持たるまそ鏡に、

あきつひれ負ひ並め持ちて、

馬かへ我が夫、

遠くには天の香具山が見え、藤原の宮の薨も霧に籠つた秋の朝
 籬の下には萩をみなへしなどが咲亂れて居るわびしい田舎家の
 門を、まづしい旅商人は山城の方へ行くべく、今や立出でようと
 して居る。

送り出たのはうら若い妻で、その手には古い鏡と、蜻蛉羽のやう
 な薄い領巾とを捧げて、夫に渡さうとして居る。

妻は仲間の商人どもがいづれも馬で行く遠い旅路に、我が夫が
 乗るべき馬もなくて、いつものやうに歩いて行かうとするのを悲

しんで、世を去つた母の形見のこの二品を取出し、これを金に換へてなりと馬を買はれよ。」と勸めて居るのである。

夫は妻の心をうれしいとは思ひながら、

馬買へば妹かちならんよしゑやし

石はふむとも我は二人行かん

と詠んで、それには及ばぬ馬一匹をよし買得ても、御身と俱に行く時には、御身は歩かねばならぬよしや石を踏んでも、二人で踏まう。」と答へる。

これは萬葉集十三の巻に出て居る歌である。かの山内一豊の妻が、鏡匣から黄金を取出して、夫の爲に馬を買はうと言つた話と、千餘年を隔てた好一對の物語である。夫妻の情はこのやうにあらねばならぬと思ふ。

よしゑやし

二六 女子と文學

(一)天武天皇の妃。
(二)天武天皇の皇子大津皇子の妃。
(三)大伴宿奈磨の女。母は大伴坂上郎女。
巾幗者流
彬々

我が國の女子には和歌に秀でしもの、才學男子をして後へに墮若たらしめしもの、上古以來屢見るところなり。萬葉集の中にも、額田女王、石川郎女、坂上大郎女など巾幗者流の作品、また決して少しとせず、されどその才媛淑女の彬々として輩出せるは、實に平安時代にして、文學は殆ど女流の獨占に歸し、男子はあるかなきかに、その一隅にけおされぬ。そのかくの如くなりしは、基づくところ一にして足らざるべしと雖も、女御、更衣が各その威勢を張りて權力を争へるも、亦その一主因たるべし。即ち才學ある女子は、擧つてその招に應じて後宮に集れるなり。集りては互に才を競ひ、男子も亦これと唱和贈答せんことを求めければ、後宮はやがて文學の淵叢、女房はすなはち文界の粹となれり。かくて彩華爛漫たる平安女流文學は生まれ出でたるなり。

唱和贈答
文學の淵叢
彩華爛漫

天成の詩人

亞流

多情多恨
盡さざる概
あり

平安時代の女流文學者の中にて、最も著れしものを擧ぐれば、和歌には小野小町、和泉式部などあり。散文には紫式部、清少納言などに業平と對せしめらる。業平は天成の詩人にして、その心に感ずるまゝの歌となれるもの、風の河上を行きて水おのづからに文をなすが如し。たゞそれ感情の走るにまかせて口に上せ、敢へて刻苦鍊磨をなさず、いはゆる心餘りて詞足らざるところあり。小町も亦業平の亞流にして、たゞ感情のまゝに詠出す。その詠の業平に比して、更に濃艶優麗なるもの多かりしは、さすがに女性の作なればなるべし。

和泉式部もまた才色雙絶、多情多恨、ものに拘束せられず。怨みては咽び、笑ひては鳴り、綿々滾々として盡さざる概あるもの、實にその性情の迸り出でしところなり。その詩才の豊富にして所作の多

千載のもと

浮薄

逸氣奔放



小野小町

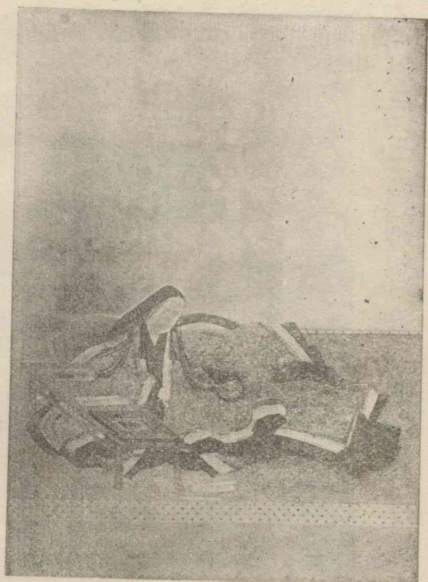
源氏物語の著者は、人も知る如く紫式部なり。早く夫に後れて寡居せる時に、この大著を成し遂げたるなり。性貞淑にして、節操の譽高く、その徳行は千載のもと、婦女の龜鑑とするに足るものありし

を以て、その詞想もまた放縱浮薄なる當時の人情風俗を描寫しながら、何處ともなく氣品高く、同情に富み、その筆致も亦逸氣奔放の風なく、順良謹慎にして、長所に矜らざる趣あり。

清少納言に至りては、その性情正に紫式部と相反し、機敏にして

澁滯

才情溢れ、屢、人を驚かせり。その著枕草子は、多く彼が遭遇せる事實の追憶、さらば時々折々の見聞感想にして、秩序もなく、筆に任せ、て書列ねたるものなり。而してその文を行ふや、奔放にして自由、些



紫式部

の澁滯を見ず、偽らず、飾らず、眞率に彼が本來の面目を暴露し來りて、その驕慢なる虚榮心の、隨處にほの見えたるもをかし。しかもその觀察は緻密周到を極め、言々は痛快警拔、寸鐵よく人を殺すが如

きものあり。

かくして紫式部と清少納言とは、その相反せる性情と著作とによりて、平安時代の文學を飾れるなり。その他、赤染衛門、伊勢大輔等

百重の大きな假あけ
梅のこし
今日もあてし

長 長
者 者
目 目
金 金
持 持

- (一) 後鳥羽天皇の宮女。右京大夫源師光の女。
- (二) 平度繁の女。
- (三) 從三位。中納言藤原雅孝の男。
- (四) 從三位。刑部卿藤原重家の男。
- (五) 正二位大納言。土御門内大臣源通親の男。
- (六) 從二位。中納言藤原光隆の男。
- (七) 傳記詳ならず。家康の仕へず。秀忠の女に嫁する。隨つて大阪城に入り、淀君の信任を得き。

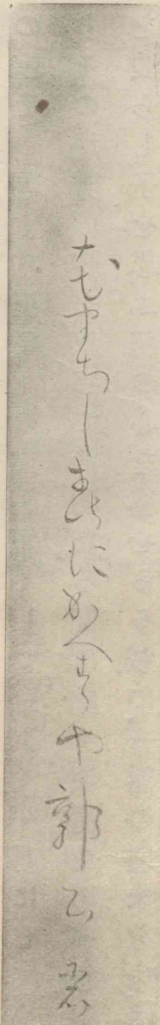
も、亦この時代にありて名を知られたる才媛なり。降りて鎌倉時代に入りては、和歌に式子内親王、宮内卿あり。散文に阿佛尼あり。式子内親王は後白河天皇の皇女にして、當時和歌を以て著れし雅家、有家、通具、家隆等も及ばざるところありきといふ。されどこの時代を代表せる女流は阿佛尼なり。阿佛尼は藤原爲家の室。その著十六夜日記の文、詞短くして意長く、平易にして高雅なり。その地勢形勝を叙して簡明なる間に處々旅情をのべ、怨恨の念を洩らし、子を思ふ親の心を寫せるうちに、一種の趣味を味はふことを得べし。

これより室町時代以後に至りては、女子はいたく卑下せられ、武人ひとり天下に跋扈する情態となれり。さればまた平安時代の如き才媛の輩出するを見ること能はず。たゞ戦亂の世にありて、小野お通の博學にして文をよくし、十二段草子を作れりといへるは珍

(一)伊勢の神官荒木田武遇の養女。慶徳三年(一六六三年)歿。三十四(二)水鏡、大鏡、増鏡。

花まちし春にかへすや 郭公 麗

し。徳川氏天下を一統して文教を奨励するに至りても、女流文學者にして遠く中古の盛に比すべき者を見ず。中につきて加賀の千代の俳句に於ける、荒木田麗女の歴史に於ける、やゝ見るべきあるのみなり。千代女の、ほとゝぎすほとゝぎすとてあけにけり。の句は、人のよく知るところなり。荒木田麗女の月の行方、池の藻屑は三鏡の



麗女筆蹟

後を續ぎ、慶長の頃に至るまでの歴史を述べ、我が國女流の歴史家として、人の推奨するところなり。

我が國の女流文學は、かくの如くにして明治聖代の文化に入ることを得たり。王政の維新とともに、女子教育日に月に隆盛に赴き、また昔日の比に非ず。將來社會文化の進むにつれて、男子は研究發

研鑽

(一)山城國愛宕郡。
(二)山城、近江兩國の界に逢坂山あり、昔ここに關あり

(三)近江國栗太郡の宿驛。

(四)近江國野洲郡の宿驛。

明に心を潜め、生存競争に力を盡すべし。この時に當りて、女子たるもの亦我が固有の文學を研鑽し、以て文學史上に光彩を添ふる覺悟なかるべからず。
——藤岡作太郎「國文學史講話」による——

二七 十六夜日記

阿 佛 尼

栗田口といふ所より車は返しつ。程なく逢坂の關こゆるほどに、
さだめなき命は知らぬ旅なれど

またあふ坂とたのめてぞゆく

野路といふ所は、こしかたゆくさき人も見えず。日は暮れかゝりて、いと物悲しと思ふに、時雨さへうちそゝぐ。

夕時雨ふる里おもふ袖ぬれて

ゆくさき遠き野路のしの原

こよひは鏡といふ所に着くべしと定めつれど、暮れはてて行き

(一)野洲郡。

(二)野洲郡。

(三)近江國坂田郡。

(四)坂田郡。名高き清泉ある故にこの里の名とす。

つかず、守山にとままる。ここにも時雨なほ慕ひ來にけり。
 いとどなほ袖ぬらせとや宿りけん
 まなく時雨のもる山にしも
 けふは十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。いまだ月の光
 はかすかに残りたる曙に、守山を出でて行く。やす川渡るほど、先立
 ちて行く旅人の、駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。
 旅人は皆もろとも朝立ちて
 こまうちわたす野洲の川霧
 十七日の夜は、小野のしゆくといふ所にとままる。月出でて、山の
 峯に立ちつゞきたる松の木、まげぢめ見えていと面白し。ここは
 夜深き霧のまよひにたどり出でてつ。さめがるといふ水、夏ならば打
 過ぎましやと思ふに、かちびとはなほ立寄りて汲むめり。
 むすぶ手に濁る心をすゝぎなば

うき世の夢やさめが井の水
 とぞおほゆる。

(一)美濃國不破郡。古今集に「みこの國せきさの藤川たえずして、君たえ代までに。」

(二)不破郡。天武天皇の時、始め關を置かむ。銚鹿、逢坂を合はせて三關と稱す。



時雨も月もいかにもるらん
 關よりかき暮しつる雨、時雨に過ぎてふり暮せば、道もいとあし

心より外に
(一)美濃國安八郡。

(三)河國寶飯郡。

くて、心より外に笠縫のうまやといふ所に、暮れはてねどとままる。

たび人はみのうち拂ふ夕暮の

、雨にやどかるかさぬひの里

二十一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山遠きはら野を分けゆく。晝つ方になりて、紅葉いとおほき山に向ひて行く。風につれなきところへ、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、あをぢの錦を見る心地す。人に問へば宮路山といふ。

しぐれけり染むるちしほのはてはまた

もみぢの錦いろかへるまで

この山まではむかし見し心地するに、頃さへ變らねば、

待ちけりな昔も越えし宮路山

おなじ時雨のめぐりあふ世を

山の裾野に竹のある所に、茅屋のひとつ見ゆる、いかにして、何の

たよりにかくて住むらんと見ゆ。

ぬしやたれ山の裾野に宿しめて

あたり寂しき竹のひとむら

日は入りはてて、なほ物のあやめもわかぬ程に、わたうどとかや

いふ所にとままりぬ。

二八 西湖の月

谷崎潤一郎

(二)支那浙江省杭州府城西に在り。風景絶佳、古來十景の稱あり。

畫舫

(三)浙江省孤山の麓にあり。

(四)西湖十景の一。

夕食を済ませた後、西湖の月を見るべく、ホテルの後から畫舫に乗つて出たのは、その晩の九時頃であつたらう。東岸に沿うて、湧金門から柳浪聞鶯の方へ漕いで行かせながら、私は舳に座を占めて、一點の曇もない大空の月の光を、満身に浴びて居た。いかに隈なく晴渡つた宵であつたかといふ事は、湖を取巻いて居る四方の山々や、汀に近く女の洗髮のやうにうなだれて居る楊柳や、稀には岸邊

(一)江西省九江府。
(二)江西省萍陽道。匡山ともいふ。風景頗るよし。

(三)湖南省の北部。支那第一の太湖。
(四)江西省の北部。支那第二の太湖。

の樓閣などまでが、一つ一つその影を水面に落して居たのでも、大凡想像することが出来よう。嘗て潯陽江邊の甘棠湖の月を觀た時に、雄大な蘆山(一)の山容が、水にくつきりと映つて居るのを眺めた覺はあるけれど、今夜の月は、あの時にも増して朗かである上に、湖の廣さも亦甘棠湖よりは遙かに大きい。水のおもてといふものは、それだけでなく、もうかういふ晩には、實際よりひろく、と見えるものだが、船がだん／＼陸をはなれるにつれて、私の行手に湛へられて居る湖の水は、腹が膨がるやうに底の方から盛上つて來て、次第に岸を遠くの方へ追ひやつてしまふのである。ここでちよいと斷つて置きたいのは、西湖の風景が美しいのは、主としてその湖水の面積が洞庭湖や鄱陽湖(二)のやうなばかり、しい大きさでなく、ひと目で見渡される範圍に於て、蒼茫とした廣さを持ち、優しい姿をした周圍の山や丘陵と、極めて適當な調和を保つて居る點にあるのだと

天と地と天と相

鼓橋

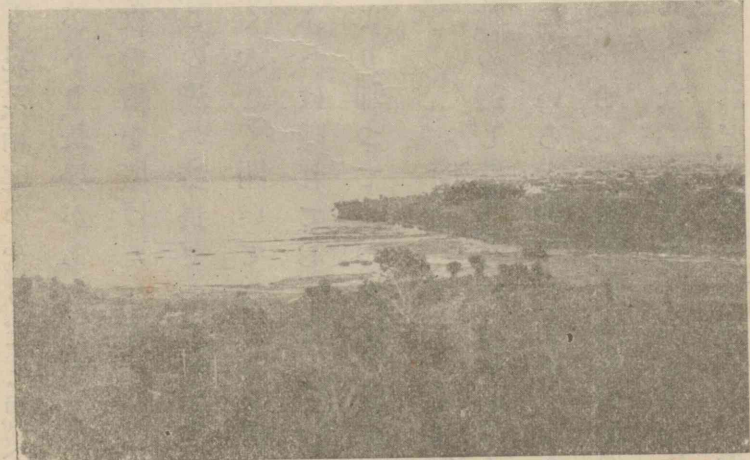
思ふ。雄大だと思へば雄大なやうにも見え、箱庭のやうだと思へば箱庭のやうにも見え、その間に入江があり、長堤があり、島嶼があり、鼓橋があつて、變化はありながら、一枚の繪を擴げた如く、すべてが同時に双の眸(三)にはいつて來るのが、この湖の特長である。今夜にしても、船が進むに隨つて、無限に大きく大きく開いて行くやうに覺えながらも、陸は決して地平線の向ふへは隠れてしまはない。が、その實、岸邊の山だの森だのは、地平線より却つてずつと遠くにあるもののやうに感ぜられる。

視野

首を擧げて四方の陸をぐるりと眺め廻した後、今度はそろ／＼と眼を下の方に向けると、私の視野にはいるものは、やがてたゞ一面の波ばかりになつてしまつて、何だか船が水の上を渡つて居るのではなく、水の底に沈みつゝあるやうな心地がする。おまけにこの湖の水は、月あかりのせいもあるやうに、さながら深い山奥の

吃水

靈泉のやうに透徹つて居るので、鏡にも似たその表面に、船の影が倒に映つてゐなかつたら、殆どどこから空氣の世界になり、どこから水の世界になるのだから區別がつかないほど、底の方まではつきりと見えて居るのである。吃水の浅い、草履のやうに薄つべらな船の上に横たはつて、水と空氣の相觸れる平面を滑に進んで行く私の體は、たゞ濡れてゐないのが不思議なだけで、時には全く水の世界に潜入したと言つてもいいくらゐである。舷に顔を出して底



(一のそ) 湖 西

暗着海動
月黄昏

(一) 宋の詩人。名は逋。字は孤山。西湖に結廬を築う。天竺の僧に交遊し、詩を撰ぶ。四十年、六十六年歿。年六十二。

(二) 林和靖の山園句。梅の詩の句。

を視きはめると、深さはやう／＼二三尺か四五尺よりない。林和靖が疎影横斜水清淺。といつたのは、思ふにこの湖のことであらうが、水清淺の意味と美しさは、かうしてこの底を眺める時に、始めて明らかに會得することが出来る。私はさつき、深山の靈泉のやうに透徹つて居ると言つたけれども、たゞそれだけでは、到底この時の感じを言現すにはもの足りない。なぜかといふのに、ここに湛へられて居る三四尺の深さの水は、靈泉の如く清冽なばかりでなく、一

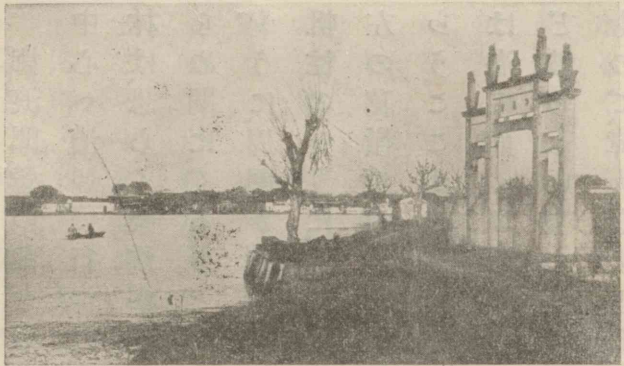


(二のそ) 湖 西

とろゝ

羅衣

種異様な、例へば、とろゝのやうな重みのある滑さと、飴のやうな粘
 を持つて居るからである。この水の數滴を掌に掬んで、暫く空中に
 曝して置いたなら、冷やかな月の光を受留めて、水晶の如く凝りか
 たまつてしまふだらう。私の船の櫓は、そのねつとりした重い水を、
 すらり／＼と切つて進むのではなく、ぬら／＼と捏返すやうにし
 て、操られて行くのである。をり／＼櫓が水面を離れると、水は青白
 く光りながら、一枚の羅衣ろいのやうに、それへべつたりと纏はり着く。
 水に纖維があると、言つてはをかしいけれども、全くこの湖の水は、
 蜘蛛の絲よりも更に微な、さうして妙に執拗な弾力のある纖維か
 ら成立つて居るやうにも感ぜられる。とにかくにも綺麗に澄んだ
 水ではあるが、輕快ではなく、寧ろ鈍重な氣分を含んだ水なのであ
 る。そんな感じがするのは、一つには、その水底みぞに蒼苔のやうな細か
 い藻草が密生してゐて、柔いピロイドの床のやうな、暗綠色の光澤



を反射して居るせいでもあらう。實際それは、非常に精巧な驚くほ
 ど美しい艶と潤を持つたピロイドとい
 ふより、外に適當な言葉を知らない。さう
 して大空の月の女神は、そのピロイドの
 地質を一層つや／＼と光らせる爲に、無
 数の長い銀の絲で、蛇のうねりのやうな
 波紋を、一面に縫取つてゐるのである。若
 しこの湖に仙女が居るならば、彼の女の
 纏ふべきマントの色は、必ずこのピロイ
 ドであるに違ない。底が餘りに浅い爲に、
 どうかすると、櫓は心なくもそのピロイ
 ドの面をかき亂す。ばつと砂埃が風に舞
 上るやうに、濁つた泥が圓い輪をゑがいて、煙のやうに水中に浮び

上る。

柳浪聞鶯の前を通り過ぎた船は、今度は進路を西に取つて、湖の中心へ漕いで行つた。左岸に黒くかたまつて居る背の低い一叢の林は、恐らく桑畑か何かであらう。右岸はと見ると、――船が私の知らぬ間に、ぐるりと方向を一轉したので、何だかかう、急に眼が廻るやうに、周囲が濶然と打開け、寶石山の保叔塔が、波に没しかゝつた帆柱のやうに、遙かな空に、ぼうつと夢の如く淡く霞んでゐる。その左の葛嶺(一)の山の裾に、灯がちら／＼と瞬いてゐるのは、新々旅館だらう。ここから眺め渡した様子では、向岸までは非常に遙かて、西湖は海の如くひろがつて居る。しかし海にしては水面が穩すぎて、殆ど波らしいものは眼に留らない。私の體が蟲けらのやうな小さなもので、偉大な大理石の圓盤の中に置かれてゐるのかとも想像される。子供の時分に野原の眞中などで、眼を瞑つてぐる／＼と廻つ

(二)ともに西湖
山の邊にある

た後で、又ぱつと眼を開くと、よくこんなひろ／＼とした、氣が遠くなるやうな天地の大いさを感じた覺がある。だが、それよりも尙不思議なのは、そんなに廣々としてゐながら、どこまで行つても、水は依然として二三尺の、――或はせい／＼人間の胸のあたりまでつかるくらゐな深さしかない。西湖は湖ではなくて、恐しい大きな池であるかの如くに、その時しみ／＼と感ぜられたのであつた。巨人が箱庭を作るとしたら、きつとこの西湖のやうなものが出来るに違ない。この湖がこのやうに靜かなのは、さうしてその面にあらゆる物象が鮮な影を印してゐるのは、畢竟、水底がかくの如く浅い爲に、波らしい波が立たない結果なのであらう。鹽の中にも山の影は映るやうに、たとひ二三尺の深さでも、水はやつぱり水である。正面に鬱蒼と堆く盛上つて居る孤山の翠嵐(一)を始めとして、その左に低く長く、女性的な優雅な曲線を起伏させて居る天竺山、棲霞嶺、南高

(一)以下いづれも
西湖の三面を
圍める山。

自文

潯陽江頭夜送客
楓葉荻花秋瑟瑟
主人下馬客在船
舉酒欲飲無管絃
醉不成歡慘將別
別時茫茫江浸月

峯、北高峰の山々が、月の光に融けてしまひさうに、朦朧と消えかゝりながらも、なほその影を一つ々々倒に映してゐる莊嚴な姿に接した時、どうしてこの湖の水底の浅さに考へ及ぶ餘裕があらう。

—潤一郎傑作集—

二九 琵琶行

昔元和十五年の秋、白樂天罪なくして、江州といふ所に流されぬ。その次の年の秋、入江の邊に夜友を送りけり。松風波の音を聞くに、愁の涙いと抑へがたし。かくて小夜更けゆくほどに、空すみわたり、月影波に隨へるを見るにつけても、我が身一つは沈まざりけりと、思ひ亂れつゝ、なほも渚を心細くて歩み行くに、浪の上遙かに琵琶の調さまざまに聞えて、搔きあはせなどの有様、世に類なきほどなり。これを聞くに、怪しき心おさへがたし。蟹人（蟹人）ものふより外に誰

忽南水上琵琶聲
主人忘歸客不覺
尋聲暗問彈者誰
琵琶聲停欲語遲
移船相近欲相見
添酒回燈重開宴

引出物



琵琶行

かは又情あるべきとおぼえければ、聲をしるべにて、誰の人にか。と尋ね問ふに、我はこれ商人の妻なり。昔よはひ十三にて、琵琶を習ひ得たること世に勝れたりき。帝の御前にてひとたび調べしにも、御引出物を賜はりき。また眉目容貌ありがたく珍しきほどなりき。しかれども春過ぎ秋暮れて、みめかたちありしにもあらず衰へにしかば、世に經る力失せはてて、せん

川口 干 みたしむ

に 坪 心

病の筵

袂くつ

方なくなりにしより、商人に契を結びて、この國の民となれりき。商人情なれば、別を惜しむこといとあさし。われを懇にせねば、出ていぬる後、立歸るほど久し。歸る程おそれければ、おのづから待たずしもあらず。かゝるまゝには、たゞ空しき船を守りつゝ、秋の月のすさまじきをのみ見る。といへり。白樂天、我琵琶の聲を聞きて愁ふかし。又この語らひを聞くに、とり重ねたる心地す。我も君も愁の心おなじからずや。必ずその愁の盡きせぬことを思ひ知るべし。我いにし年の秋より、官を遁れ都をはなれてここに沈めり。又病の筵に臥して、立ちあること容易からず。いと物心細きをりに、浪風より外に立ちまじる人もなき住處には、蘆の上葉をわたる嵐をちこち人の舟よばふ音のみ聞えて、いまだ樂の聲を聞かず。今宵の君が琵琶のしらべを聞くに、ほとゝ天の樂を聞かんが如し。これを聴く人みな涙を流せり。その中にも白樂天一人袂くちぬと見えけり。

いにしへにありしことを盡さずば
袖に涙のかゝらましやは

この人は、世の中の人の心の皆濁れるを憂しとや思ひけん、一人すまして、常は都に跡をなん留めざりける。
——唐物語——

自修文

三〇 繪に魂を入るゝ事 柳澤淇園

或人余が許に來りて、繪に魂をいるゝと申すことは、いかやうなることをしてゑがき侍れば、魂は入り候ことぞ。と問ふ。余答へていふ、すべて繪には限らず、何事にても實心をこめてさへいたさば、魂の入りらずといふ物あるべからず。他の事はいざしらず、繪に魂の入りたりと思ふは、諸國にて種々名畫も多かるうちに、我が見し泉州堺に一國寺といふ精舎あり。この寺は、千の利休もしばらく居られし時、物好を盡して、庭園座しき五間ほどもあり。一

精舎
寺
名は宗易。利休は其の號。千家流茶道の祖。堺の人。豊臣秀吉に仕へ、天正五年(一五七七)死を賜はる。年七十一。

一名は里恭。大和郡山の人。文武兩道に達す。寶曆八年(一七八八)歿。年五十六。

(一)狩野元信。狩野家第二世。足利氏に仕へ、法眼となす。法眼とは僧位である。永祿二年(一五九一年)歿。年八十四。そのかみその當時。

一家をなす。一流を大成する。

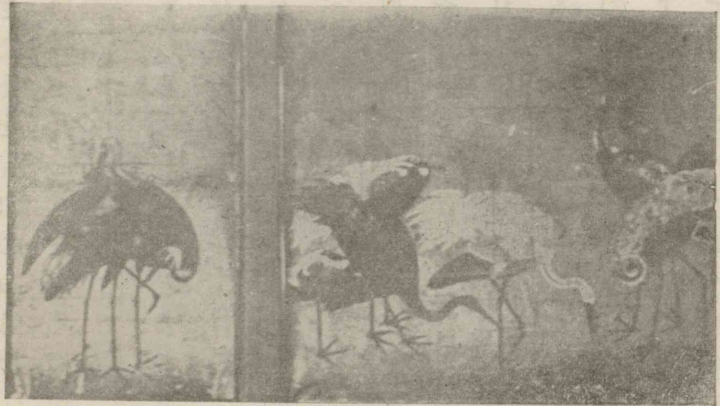
間には檜の木一本をゑがけり。一間には臥したる鶴二十五羽ばかりをゑがきてあり。いづれも彩色ありて古法眼元信の筆といひ傳へたり。そのかみこの繪をかける畫師、この寺に寓居すること三年ばかりのうちに、何ひとつゑがきたることなく、碁を好み、たゞそれのみ日ごとの樂みとして、あるはここかしこ遊びあるくには、はやく三年を経たり。一たびだに筆をとりしこともなきは、いかにも心得ざるものかなと思ひて、或時、住持の申されけるは、「その許畫をもて一家をなせりといひながら、筆を執りたることもなく、圍碁にのみ年月を過さるゝはいかにや。我衣食の費をいとふにはあらねど、何處へなりともあそび給へ。愚老も所用ありて京へのほり、事によりては一年も在京せんもけかりがたし」といふに、彼の畫師ききて、「それこそいと名残をしきことに候へ。さあらば年來の恩謝に、何か少しの畫をのこしまるらすべし」とて、心がまへのみにて、又四五日ほどふるに、住持は何をゑがくと

絶えて決して。全く。

そとそつと。しづかに。

明障子紙をはつた普通の障子のこと。

まださ朝早く。



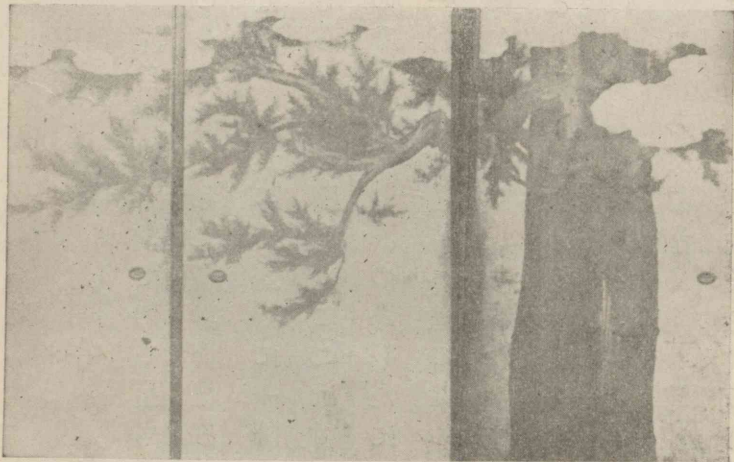
國寺の「鶴」

見たくて待てども、絶えて筆をとらず。或夜、小坊主の、住持が居間に夜ふけて來り、ひそかに申すやう、「かしこに行き給ひて、そとのぞきて畫師のありさまを見給へ。」とささやきけるに、やがて小坊主にいざなはれて、畫師が居間をうかふふに、明障子の腰板に身をよせて、さまざまの姿をかへつゝ、寢起するありさまを見るより、小坊主を引寄せ、「來よ、かしのぞくべからずはやく臥せよ。」とて、その身も寢間に入りたり。あくれば、畫師まだきに起きいで、一間なる障子にゑが

Handwritten notes at the bottom of the page, appearing to be a series of stylized characters or symbols.

不凡 ふつうでない。なみでない。
 丹青 丹はあか、青はあををいふ。彩色のこと。轉じてゑのこと。
 さあるに 然るに。
 夜もすがら 夜ぢゆう。終
 とやせん云 云。かうしよう。か、あ、し、う。かなど。
 思ひかまへ 考へくふうす
 杉戸 杉の板で造つた戸
 下向 都からみなかへ行くこと。もと京都は都であつたのでいふ。

きたるを見れば、みな臥したる鶴なり。畫勢不凡にして、丹青の妙いふべからず。さあるに、又の夜はいかにとうかふに、前の如く夜もすがら寝ずして、明けなばかくやゑがかん、とやせんかくやあらましなど、ひとりつぶやきつゝ、臥しぬれば、住持も知らぬ顔にてすぐしゝが、十日あまりにして、その鶴およそ二十四五羽をゑがけり。又も夜ふけてのぞき見るに、こたびは肘をはり、足をのべ、手を口にあてつゝ、鶴のふしたるさまを見て臥しけるに、夜明けてかの畫師が許に住持來りて、「けふゑがき給はん鶴の姿は、かやうにや候ひぬらん。」とよべのぞき見たる姿のさまして見せければ、打驚き、「禪師にはわがゑがかんと思ひかまへし心をはやくも覺り給ふはいかに知り給へるにか。」と問ふに、「いやとよ。昨夜そのもとのやうすを、そとうかひて知りたり。」といへば、畫師それよりして、二枚はゑがかずして、杉戸の畫に、檜の木一樹をゑがきて出立ちぬとぞ。この檜の木をゑがきし後、東國へ下向の折から、



國の寺の「檜」

東海道箱根の山中にて、檜の木の枝の心になひたるがありければ、東國へは下らずして、ふたたび泉州一國寺へ立越えしかば、住持見て大きに驚き、「東國へ行き給ふと聞きしに、又もや來られしはいかなる事にか。」といふに、「さきにゑがきし檜の木の枝、一枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たれば、わざくゝ立戻りたり。」とて、一枝を書添へ、暇乞していで去りぬとぞ。畫に魂を入るゝといへるは、かゝる類と思ひぬ。といへば、或人も感じて歸りぬ。——雲萍雜志——

三一 鎮守の森

笹川種郎

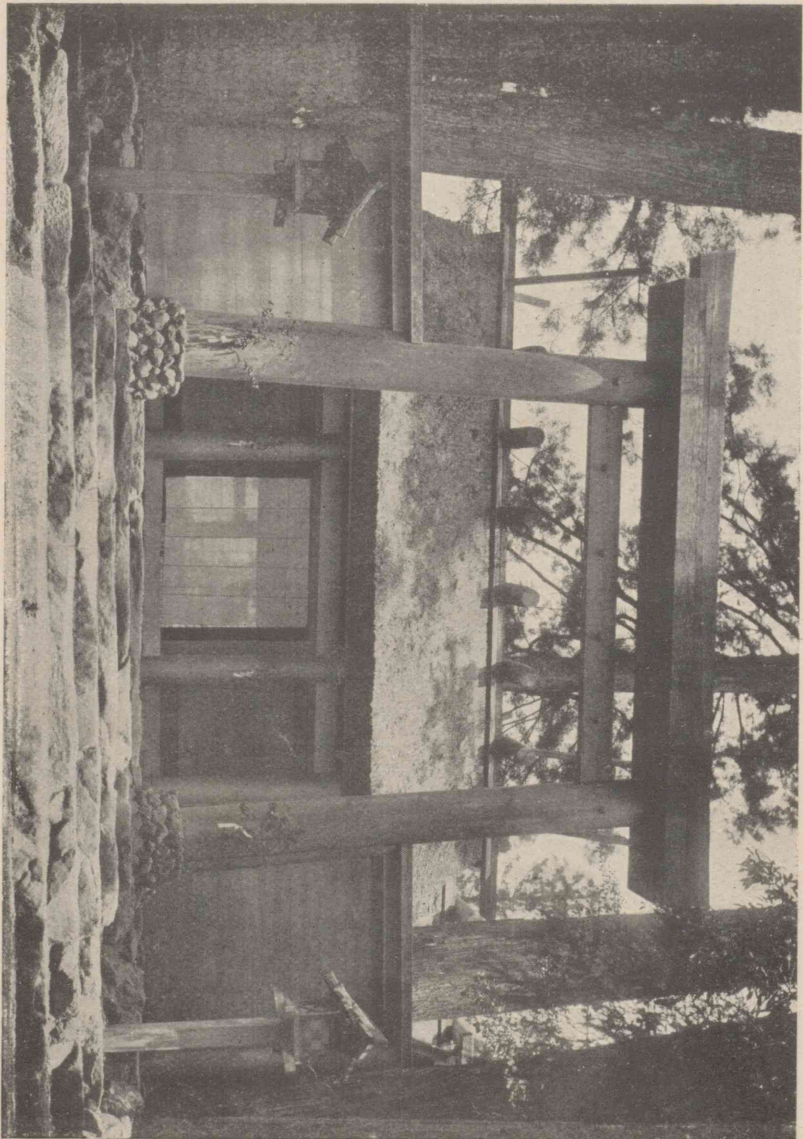
殿角

花信を傳ふ

(一)何事のおは
しますかおは知
らねどもか
たげなきに
涙こぼるゝ(二)
(西行法師)
婆娑として

满目蕭條として、田も畠も霜枯の風情見るかげもなき間に、一叢
こんもりとして綠鬱蒼たるものは鎮守の森なり。金も石も燦けん
ばかりの夏の眞晝中に、一陣の涼風殿角より起りて、社前の注連繩
さらく〜と鳴れば、ここは村人等の安樂世界となりて、拜殿に晝寐
の夢は圓なり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて、
一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の蔦蘿紅に染出でて、夕日
の色もまばゆし。花朧なる曉、月明き夜、松、杉小暗く茂りて、瑞籬のほ
とり神さびたり。詩趣ひとりここに饒にして、何事のおはしますか
は知らねども、神々しく覺ゆるなり。

日落ちて月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、鎮守の森
は舞踏場と化するなり。祠頭の旗幟翩翩として、風に靡く時、一村の



(宮内) 宮 神 勢 伊 丹

春燈

老幼往還織るが如く、鎮守の祭禮は、一歳中復と得難き歡樂なり。年豊なれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。洵に鎮守の森は一村の望をあつめ、一郷の中心として、神聖なる、しかも面白き所たるなり。

かゝる鎮守の森にいます神は、多くはその土地、その土着の民と、何等かの關係あり。溯りてこれを考ふれば、氏族、部民がその祖先を祀りたるものも少からず。諸國に鎮座し給ふ神社は、畢竟鎮守の森の大きいなるものなり。鹿島、香取の神宮は武甕槌神、經津主神の子孫が創めたる所にして、宇都宮二荒神社は毛野君の一族がその祖先を祀れるところなるべし。その一層大いなるものには出雲大社あり。その最も大いにして日本の鎮守たるものには、五十鈴川の上に宮柱太しき立て千木高知ります伊勢大神宮もあらせ給ふなり。

これを小にしては一村の中心にして、これを大にすれば帝國の中心たり。祖先の神靈、前賢の精魂は、とこしなへに鎮守の社に留り

權道

て、子孫、後人の精神に通ひ、彼等をして奮勵自進せしむべし。天佑、神助の信仰は勇氣鼓舞の最良法なり。しかも、信仰とは權道にあらず、方便にあらずして直ちに神に接し、靈に感ずる唯一の法なり。

自覺的

祖先崇拜なるかな。これ獨り原始の觀念のみにあらず。祖先の功勳は後人奮勵の龜鑑たり。子孫の名譽心を發揮すべき興奮劑たり。たゞその崇拜をして保守的たらしむる勿れ、回顧的たらしむる勿れ。進歩的たらしめざるべからず、自覺的たらしめざるべからず。

草萊
祠宇

ここに於てか、鎮守の森をして、一層、一村一郷の中心たるの實あらしむべきなり。鎮守の森をして、更に神さびて神靈の窟屋たるに適せしむべきなり。これがためには、苗樹を植ゑ、草萊を除き、祠宇を修め、園池を美にし、以て一村一郷の崇敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき村人にも美の觀念を興ふる所、他に向つて誇とする所、異郷に在りてもなほ戀々の思あるべき所たらしむ

べし。小學兒童の運動會も、これを中心としてこの附近に行はしむべし。小さな村落圖書館の如きも、その附近に設けらるれば最も妙なるべし。鎮守の森をして一村一郷の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の上に得るところ極めて大なるものあらん。

三二 鬼に瘤を取らるゝ事

これも今はむかし、右の顔に大きな瘤ある翁ありけり。大よそ山へ行きぬ。雨風はしたなく、歸るに及ばで、山の中に心にもあらずとまりぬ。又木こりもなかりけり。おそろしさすべき方なし。木のうつぼのありけるにはひ入りて、目もあはずかままりてゐたる程に、遙かより人の聲多くして、とゞめき來る音す。いかにも山の中にただひとりゐたるに人のけはひのしければ、少しいき出づる心地して見出しければ、大方やうくさまゝなる者ども、赤き色には青

はしたなし

とゞめく

てんの目

横座

ゑみこだる

き物を着、黒き色には赤き物を着、大方目一つある者あり、口なき者など、大方いかにもいふべきにあらぬ者ども、百人ばかりひしめき集りて、火をてんの目の如くにともして、我がゐたるうつほの木の前にもまはりぬ。大方いとどものおぼえず、むねとあると見える鬼、横座にゐたり。うらうへに二ならびに居なみたる鬼、敷を知らず。その姿おのゝいひ盡し難し。酒まゐらせ遊ぶありさま、この世の人のする定めなり。たびゝかはらはじまりて、むねとの鬼、殊の外にゑひたる様なり。末より若き鬼一人立ちて、折敷をかざして、何をいふにか、くどきぐせざることはいひて、横座の鬼の前にねり出て、くどくめり。横座の鬼、盃を左の手に持ちて、ゑみこだれたるさま、たゞこの世の人の如し。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。悪しくよく舞ふもあり。あさましと見るほどに、この横座にゐたる鬼のいふやう、こよひの御遊こそ、いつにもすぐれたれた。たゞし、さも珍しから

すぢりもち

あざむ

んかなでを見ばや。などいふに、この翁ものつきたりけるにや、また神佛の思はせ給ひけるにや、あはれ走り出でて舞はばやと思ふを、一度は思ひかへしつ。それになにとなく、鬼どもがうちあげたる拍子のよげに聞えければ、さもあれ、たゞ走り出でて舞ひてん。死なばさてありなんと思ひとりて、木のうつほより、ゑぼしは鼻に垂れかけたる翁の、腰によきといふ木きるものさして、横座の鬼のゐたる前にをどり出でたり。この鬼どもをどりあがりて、こはなにぞ。とさわぎあへり。翁のびあがりかゞまりて、舞ふべきかぎりすぢりもちり、えいごゑをいだして、一庭を走りまはり舞ふ。横座の鬼よりはじめて、集りゐたる鬼どもあざむ興ず。横座の鬼のいはく、多くの年ごろこの遊をしつれども、いまだかゝるものにこそあはざりつれ。今よりこの翁、かやうの遊に必ず参れ。といふ。翁申すやう、さたに及び候はず。参り候ふべし。このたび俄にて、をさめの手も忘れ候ひに

すぢなし

たり。かやうに御覽にかなひ候はば、しづかにつかうまつり候はん。といふ。横座の鬼、いみじう申したり。必ず参るべきなり。といふ。奥の座の三番にゐたる鬼、この翁はかくは申し候へども、参らぬことも候はんずらん。おぼし、質をやとらるべく候ふらん。といふ。横座の鬼、然るべし。といひて、何をかとるべき。とおのゝいひさたするに、横座の鬼のいふやう、かの翁がつらにある瘤をや取るべき。瘤はふくのものなれば、それをや惜しみ思ふらん。といふに、翁がいふやう、たゞ目鼻をば召すとも、この瘤はゆるし給ひ候はん。年ごろ持ちて候ふものを、ゆゑなく召され、すぢなきことに候ひなん。といへば、横座の鬼、かう惜しみ申すものなり。たゞそれ取るべし。といへば、鬼よりて、さはとるぞ。とねぢてひくに、大方痛きことなし。さて、必ずこたびの御遊に参るべし。とて、曉に鳥など鳴きぬれば、鬼ども歸りぬ。翁かほをさぐるに、年ごろありし瘤、跡かたなく、かいのどひたる

つや／＼

くすし

いづら

天骨もなく

やうに、つや／＼なかりければ、木こらんことも忘れて、家にかへりぬ。妻のうば、こはいかなりつることぞ。と問へば、しか／＼と語る。あさましきことかな。といふ。隣にある翁、ひだりの顔に大きな瘤ありけるが、この翁、瘤の失せたるを見て、こはいかにして瘤は失せ給ひたるぞ。いづこなるくすしの取り申したるぞ。われに傳へ給へ。この瘤取らん。といひければ、これはくすしの取りたるにもあらず。しかじかのことありて、鬼の取りたるなり。といひければ、われその定にして取らん。とて、事の次第をこまかに問ひければ、教へつ。この翁いふまゝにして、その木のうつぼに入りて待ちければ、まことに聞くやうにして、鬼どもいて來たり。ゐまはりて酒のみ遊びて、いづら翁は参りたるか。といひければ、この翁おそろしと思ひながら、ゆるぎいでたれば、鬼ども、ここに翁参りて候。と申せば、横座の鬼、こち参れ。とく舞へ。といへば、先の翁よりは天骨もなく、おろ／＼かなでた

りければ、横座の鬼、このたびはわろく舞ひたり。かへすく、わろし。その取りたりししちの瘤かへしたべ。といひつけければ、末つ方より鬼出てきて、しちの瘤かへしたぶぞ。とて、今かたぐの顔に投げつけたりければ、うらうへに瘤つきたる翁にこそなりたりけれ。物うらやみはすまじきことなりとか。

—宇治拾遺物語—

三三 み山のしづくその一 小池道子

くれ惑ふ
いかなればかゝる御事にならせ給ひけん、今なほ夢の心地してくれ惑へるを、まして遙かにうかゞひ奉りて、驚き悲しみ叫びけん。國民の心は、いかばかりぞ。

○ 神とのみ仰ぎまつりしすめらぎの
現人神

み代よろづ代とたのみしものを

大みはふりの日より一月にあたれる十三日に、大後の宮出立た

(一)大正元年十月十三日。

しめやかに

(一)攝政宮裕仁親王。

(二)秩父宮雍仁親王。

(三)高松宮宣仁親王。

せ給ひて、伏見桃山の御陵御拜あらせ給はんと定めさせ給ひぬ。

十二日には、上、^(一)後の宮渡らせ給ひて、御しめやかに御物語聞えかはし給ふ。東宮、^(二)淳宮、^(三)光宮も参り給ふ。御道の程など、何くれと御心添へさせ給ひつゝ、みなよく心して仕へ奉れなど仰言あり。

十三日、空うらゝかに晴れて、小春日和とやいはん、風なくして暖なり。旅の装整ひたれば、まづ御眞影の御前に額づきぬ。かゝる悲しき御旅に出でさせ給はんとは思はざりしをと思ふにも、涙止らず。大宮の御旅に出でさせ給ふ度ごとに、御門出を祝はせ給ひて、御調度など大御心盡しものども、御手づから参らせ給ひしことなど、すゝろに思ひ出づ。黒き御衣に御喪のしるし深くつきたるを奉り、打沈ませ給へる御氣色、仰ぎ奉るも更に悲し。泰宮参り給へり。御門より新橋までの御道筋には、すきまなく軍人の立ちならびたる後に、數萬の國民謹みて拜み奉れるにつけても、御惱重らせ給ひける

(四)聰子内親王。
明治天皇第九皇女。東久邇宮裕彦王殿下に御降嫁。
(五)新橋驛。當時の東海道線の驛。

(一)東園基愛。

日より、二重橋の外につらなりて、熱き誠を籠めつゝ、御平癒を祈り奉れりと聞し召しつる折のことも思し出づらん。老若男女幼兒に至るまで、涙をのみて立てるすがた、いと悲し。
新橋には上の御使として、東園侍從參り給へり。後の宮、御送りに渡らせ給ふ。皇族を始め奉り、百官列を正して奉送するもの數を知らず。空はうらゝかなれど、野山の景色物寂しう身にしみたり。

心なき草木を見てもこの秋は

なみだの種とならぬものなし

御道すがらの驛々に奉送する數萬の人のおももちも、皆同じさまなり。谷川の流清き方に目とままる。

高嶺より下りてもなほ谷川の

にこりなき世に住むよしもがな

いづこなりけん、富士の嶺うすくあらはれたり。

(一)守正王。
御息所

薄墨の衣うちかづきふじのねも

むかへまつるか。けふのいでまし

静岡に着かせ給へば、人垣築きたらんが如し。この御用邸に、去年の秋まで、大演習御統監の行幸の度毎に宿らせ給ひしことども思し出でて、打沈ませ給ふ御氣色、畏かれど、ことわりと窺はれたり。

十四日、天氣よし。九時御發車なり。富士の嶺も薄けれどよく見ゆ。常に懐かしかりつる東海道の海山の景色を見るにつけても、

行くところ悲しかりけりみひつぎを

おくりまつりし道ぞとおもへば

名古屋に着かせ給へば、梨本宮、御息所とともに出てむかへさせ給へり。軍隊の駐れる御道筋、いづこも軍人の整列せざるかたなきに、ましてここは夥し。奉迎の人も静岡の如し。この離宮は名だたる城址なれば、三百年の昔おぼゆるつくりざまなり。

自見
自見

三四 み山のしづく その二

十五日、空は晴れたれど、けふぞ悲しき日なりける。七時の御發車なり。七條の傍車場には賀陽宮の御息所参り給ひ、奉迎の人殊に多し。十一時に桃山の假停車場に着かせ給へば、久邇宮、御息所ともに出でむかへさせ給へり。華族、高官の人々、平松好子君を始め、舊女官たちも、女孺も、諸寺の尼君も参り給へり。これより御陵道に進ませ給ふ。大宮の御心、いかにおはしますらんと推量り奉られて、さまざま思ひ出づること多きに、今まで包みおほせたりし涙、溢れ初めて止めん方なく、誰もくうつむきぬ。上りくつて、御陵前に進ませ給ひて、御拜あり。皆御陵に額づきて拜み奉るも、なほ夢の心地す。御須屋まで上らせ給ひ、いと懇に拜せさせ給ふ。皆額づき伏して、捧げ奉るものはたゞ涙なり。

御息所
御息所
御息所

(一)京都停車場。
(二)故邦憲王の妃好子。
(三)多嘉王。
(四)平松子爵の伯母。

女孺

御須屋
捧げ奉るものは涙

かりうよち
すや
おのよ

まうのぼる

大御歌うかゞふこともなかりけり
たまの御こゑは耳にのけれど
頭もたげんとしては、また打伏しぬ。畏かれど御須屋近うまうのぼりて、幾度となく拜み奉り、まかでんとする折しも、こほろぎの一つ居たるを見る。

なれひとり御前にありてこほろぎの
かなしき音をや聞えあぐらん
また

天つ日の高き恵はあらがねの
つちに入るとも忘るべしやは
限りあればまかでんとす。
こゝろのみあとに残して御陵の
山をくだるが悲しかりけり

あらがねの
つち

わたらひの宮

(一)京都の歌人。
(二)高崎正風。

やうく涙おしのごひて、拜殿の前よりまた伏拜む。

わたらひの宮居を仰ぐ心地して

たかくたふとし君のみさゝぎ

かうくしさ譬へん方なし。

天の下しろしめしつる天皇も

つひのおましはこの御山のみ

もとの停車場にて、晝のおもの奉る。ふと見れば高畠千畝君見え

たり。まづ悲みの詞をかはずも涙なり。高崎師翁の上も言出でたり。

限りなきこの悲みを知らぬまに

君ぞうらやまれける

御車は動き出でたれど、なほ御陵の方のみ打仰がせ給ふ。四十餘

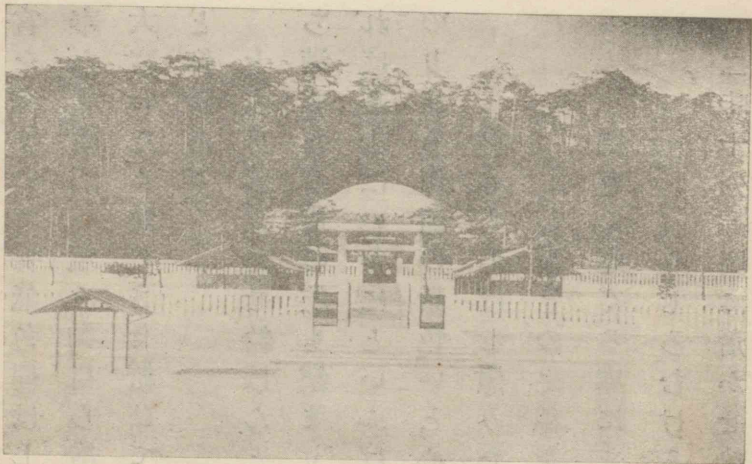
年の御在位の間、御政事にのみ大御心を留めさせ給ひ、假初の御物

語の折にも、國民の上のみ常に仰言ありて、大國の君と仰がれ給ふ

一ナしたんてんかろり

...

(一)威仁親王。
(二)花房太郎。



御身ながら、功は諸臣に授け給ひて、何一つ慰とせさせ給ふことな
く、民の樂みを樂みとせさせ給ひ
伏て、をしく氣高くましつる
見 御行は、誠に萬世の君主の鑑とこ
桃 そ稱へ奉るべけれ。日月の如く並
山 び立たせ給ひて、坤徳を積ませ給
東 へる大宮の御ふるまひ、はた自ら
御 世に漏りて、山の奥、島のはてなる
陵 國民も一つ心に慕ひ奉れるは、比
なき皇國の譽なるべし。六時過ぐ
る程、名古屋に着かせ給ひぬ。舞子
にまします有栖川宮より花房武

官を御使にて、御氣色伺はしめ給ひ、御苑にて作らせ給へる洋花を奉らせ給ふ。花瓶は御自ら繪を書かせ給ひて、焼かせ給ひたるなり。大宮いたく愛てさせ給ひて、御傍に据ゑさせ給ひ、都まで持て参れと仰言あり。

十六日、出立たせ給はんとする頃より、小さめ降出てたり。人の立ち満ちたる道の埃も鎮まりぬ。程なく止みて、瀨松わたりになりぬれば、富士はいかにといふばかりに晴渡りぬ。いづくもくゞ豊に實のりたる田面の景色、いと心地よし。

御心もしばし慰みたまふらん

あきの足穂をみそなはしつゝ

御車の過ぐる處に立ちながら

うしろむけるは案山子なりけり

二時十分静岡に着かせ給へり。御参拜も事なく済ませ給ひつれ

ば、御心もおちゐさせ給ひけん、いさゝか御物語などせさせ給ひて、御氣色麗しきに、さぶらふ人々も少し眉を開きぬ。近き年より寒さに堪へさせ給はねば、御道の程いかならんと、上も、後の宮も御心もとながらせ給ひ、人々も思ひわづらひ奉りつるを、出立たせ給へる日より、暑きまで暖なるは、天佑とやいふべからん。

十七日、天氣よし。いさゝか風のあればにや、高樓より見れば、富士の嶺晴渡れり。十時二十分の御發車なり。野も山も心地よく晴れたれど、なほ曇れるものは人々の心なり。興津の濱の波荒くして、なかなか景色を添へたり。富士は珍しきまで残なく晴渡りぬ。

富士が嶺にかけてぞ仰ぐ大御國

ひろめたまひし君が御稜威を

拜觀の人々は到る處かはることなし。幼き學生のつらなれるさま、殊にらうたし。そこばくの赤子をもたせ給へれば、御心ゆたかに

らうたし
そこばく

(一)子爵河鱒公篤

辱辱

めいぼく

千年を保たせ給へなど慰め聞え奉れば、例のと打笑ませ給ふ。三時五十分、新橋に着かせ給ひぬ。勅使は河鱒侍従なり。後の宮出てむかへさせ給ひ、皇族を始め、迎へ奉り給へること御送の時の如し。道子老いくづをれたる上に、この度の悲みに頭をうたれたらん心地して、御伴つかう奉らんことなど思ひもよらざりしを、大宮のいとも辱き仰言にて、御後にさぶらひて、近く御陵を拜し奉りしは、上なき身のめいぼくになん。

昭憲皇太后の御事

昭憲皇太后の御坤徳高くましまししこと、普く世の知るところなれど、余が最も感動せしは、アメリカ人の口より聞きたる御逸事なりき。余が外遊中、ニューヨーク市に於て、日米協會の會合あり、佐藤大使の新任を祝したる折なりしが、彼の國の紳士代る

(二)名は愛曆。

親善
したしみ仲よくすること。

何くれと
なにやかやと。いろいろと。

光榮を擔ふ
めいよを身にうける。

數ならぬ身
取りたてていふ程でもないつまらぬ身。

代る立ちて、日米親善の事などを演説せし中に、バレットといふ一紳士、日本皇室の世界に比類なき事を説きて、さていふやう、自分は二回までも日本に旅行したり。第一回は今より二十年前も以前なりけん、その折參内して始めて時の皇后に拜謁せしが、皇后は何くれと、自分の家庭のさまなどをも問はせられしかば、母の健全なる由をも申し上げたり。五六年前第二回の旅行に際して、又もや謁見の光榮を擔ひしが、皇后は畏くも前年一度拜謁せし折のことを御記憶あらせられ、その許の母は尙健全なりや。と問はせ給ひぬ。數ならぬ身を御記憶あらせられしことだに、感激に堪へざるに、母は尙健全なりや。の御一語は、ひしと我が胸にこたへて、嗚呼、この一語、日本の皇后陛下ならては宣はせぬところなるべし。幾度ヨーロッパ諸國の皇后に謁見しても、遂にこの語を聞かざりき。といへり。余は同氏の演説中、この一段を聞きて、自ら涕涙の兩頬

客心云々
旅行中の心が
遠く日本まで
飛んで

に傳はるを覺えず。客心遙かに故國に飛びて、その後の演説は遂に耳に入らざりき。異郷萬里、この御逸事を承れる余が感想諸子能くこれを察せよ。

女子新國文 卷七 終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本
書には主として通用字を用ひたり。)

| | |
|---------------------------------|-----|
| 劔 剪 刃 函 滅 涼 準 况 決 冒 兔 免 佞 仍 兩 | 通用正 |
| 劍 劔 翦 刀 函 滅 涼 準 况 決 冒 兔 免 佞 仍 兩 | 通用正 |
| 窳 墻 塚 場 噴 噐 唇 叙 収 厨 厨 卿 鄉 即 効 | 通用正 |
| 窳 墻 塚 場 噴 噐 唇 叙 収 厨 厨 卿 鄉 即 効 | 通用正 |
| 拔 拏 戲 懺 懣 慨 恒 徃 稟 屏 并 帽 尅 寶 寇 | 通用正 |
| 拔 拏 戲 懺 懣 慨 恆 往 廩 屏 并 帽 剋 寶 寇 | 通用正 |
| 濱 溫 冰 藏 欸 概 桿 晉 昂 既 整 擗 擗 擗 插 | 通用正 |
| 濱 溫 冰 藏 欸 概 杆 晉 昂 既 整 擗 擗 擗 插 | 通用正 |
| 盃 鼓 痴 畧 留 畫 瑣 玄 貓 猪 猿 熔 陰 潛 潤 | 通用正 |
| 杯 鼓 癡 略 畱 畫 瑣 玄 貓 猪 猿 鎔 陰 潛 潤 | 通用正 |
| 續 續 紀 穀 粘 籤 纂 節 笄 竊 秘 願 穎 稟 研 | 通用正 |
| 續 續 紀 穀 黏 籤 纂 節 笄 竊 祕 願 穎 稟 研 | 通用正 |
| 厠 勅 冲 劬 俟 京 亡 並 萬 | 通用正 |
| 廁 敕 沖 倣 埃 京 亾 並 萬 | 通用正 |
| 婚 姊 妍 妊 野 坂 嚙 叶 厮 | 通用正 |
| 婚 姊 妍 妊 埜 阪 齧 叶 廝 | 通用正 |
| 考 慙 富 忘 庵 嶋 峯 峩 岳 | 通用正 |
| 攷 慚 富 忘 菴 島 峰 峨 嶽 | 通用正 |
| 概 槁 楫 棕 基 案 柿 村 普 | 通用正 |
| 槩 槁 楫 棕 基 案 柿 村 普 | 通用正 |
| 砧 睹 狸 貉 無 烟 汗 昆 朴 | 通用正 |
| 砧 視 狸 貉 无 煙 汚 毗 樸 | 通用正 |
| 縑 縑 網 紆 糾 粽 筍 競 稿 | 通用正 |
| 縑 縑 網 紆 糾 糝 筍 競 稿 | 通用正 |

附 錄

同 字 表 (いっしょにて)

羈 船 羈
 船 船 船
 花 荒 花
 華 荒 華
 紅 訛 紅
 衽 譌 衽
 谿 踪 谿
 逋 蹤 逋
 遜 鏃 遜
 雁 鏃 雁
 鷓 鏃 鷓

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。
 *標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

巨 互
 榘ニ同ジ。
 笨ニ同ジ。アラシ、齷、粗。
 カラダ。
 タマシ、タマ。但馬。
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、猥。
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
 カブト、兜。「甲冑」
 ツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

協 協
 カナフ、叶。
 ガビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
 ウテナ、ダイ。
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 アキナヒ。
 モト、本。
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。

託 託
 拓ニ同ジ。オス、ヒラフ。
 ヨル、ヌノム、ユダヌ、カコツク。
 ハラフ。又アグ。
 ニナフ、カツク。
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。
 ヤリ。
 鏃ニ同ジ。鏃ノ聲ノ形容。
 アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 ホソイト、細絲。
 イト。
 支那ノ地名。
 カラヤム。

虫 虫
 魚介類ノ總稱。又ママシ。
 ムシ。
 ワビ、ワブ。「詔狀」
 訛ニ同ジ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。
 ユタカ。
 マデ。
 ユク、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

^キ 卻 ^シ 卻
シリング。退卻
キタフ。「鍛鍊」
シコロ。「鍛」

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし
 かひ (詮の意
の場合)
 きつと
 さすが
 しまふ
 せつかく
 だけ
 だめ
 ちやうど
 ちよつと

覺束なし
 甲斐
 屹度
 流石、道
 仕舞ふ
 折角
 丈
 駄目
 丁度
 一寸、鳥渡

でたらめ
 とうく
 とかく
 とて、とても
 とにかく
 なかく
 ふるまひ
 はかなし
 ほんたう
 むだ
 むづかし
 やたら
 やはり

出鱈目
 到頭
 兎角、左右
 迎
 兎に角
 中々、却々
 振舞
 果敢なし
 本當
 無駄
 六ヶし
 矢鱈
 矢張

附 録 終

大正十一年十一月十三日印
 大正十一年十一月十三日發
 大正十二年十二月十二日訂正再版印刷
 大正十二年十二月十五日訂正再版發行



女子新國文典附

| 定 價 | 大 臨 |
|-----------|-----------|
| 自卷一各金四拾貳錢 | 自卷一各金七拾六錢 |
| 自卷四各金四拾錢 | 自卷四各金七拾貳錢 |
| 自卷五各金四拾錢 | 自卷五各金七拾貳錢 |

著 者 芳 賀 矢 一

東京市神田區通神保町九番地

印 發 者 兼 刷 行 者 合 資 會 社 富 山 房

合資會社富山房社長

代 表 者 坂 本 嘉 治 馬

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印 刷 所 株 式 會 社 秀 英 舍

發 行 所

(明治二十九年六月設立)

東京神田

合 資 會 社 富 山 房

電話神田三〇一四、三六六三、三七六〇番
振替口座東京五〇一〇一

文庫
23
766

広島大学図書
2000039766
